

# 蘇毗の領界

—rTsañ yul ṅ Yan lag gsum pañi ru—

山口瑞鳳

## 目次

- 1 はじめに
- 2 文成公主文書について
- 3 rTsañを含むSum ruの位置
- 4 Khyun po の gTsañ smad ṅ Nan po
- 5 Sum ru の東端 gNe yul ṅ rNags
- 6 Thon, Khyab, rGya ṅ rGrod
- 7 おわりに

## 1 はじめに

先に「古代チベット史考異」と題して、吐蕃王朝と唐朝との姻戚関係を考えて見た<sup>(1)</sup>。その後半部の冒頭にF. W. Thomas 氏が論じたことのあるStein 卿蒐集のチベット文書断簡を取りあげ、Thomas 氏の解釈を修正して、筆

者自身が後代のチベット文献から再構成したクロノロジーの支えに利用してみた。

この文書を利用するに当つて、年次決定をめぐり最初から全く疑念を挟まなかつたわけではなく、Thomas氏自身が引用している敦煌編年記収載の六八九年におけるチベット王女 Khri bans と Ha sha rje (吐谷渾王)との結婚の記事が気にかかり、利用した文書の終りに近く dBahs sTag agra khon lod<sup>(e)</sup>とも疑われる名が見えたので、問題を放置するわけにはいかないと思つた。というのは、dBahs sTag sgra khon lod は七二七年に blon che 論苴に任命された名將だつたからである。

Thomas 氏を取りあげた文書にはこれと全く同名の Kuri bans が Ha sha 王の母として現れ、当時、その王子が Ma ga tho gon kha gan を称していた。文書の年次は十二支のみで示されているから、この十二支を六巡分遅れさせると、つまり七十二年後のものとすれば、編年記の Khri bans の子が成年に達してここに現れてもよく、dBahs sTag sgra khon lod が登場しても矛盾がない。ただ、文書で二回示される文成公主の名が金城公主でありさえずればよいのである。加えて、金城公主を迎えにいつた shan bTsan to re lhas byin を思わせる shan bTsan to re<sup>(e)</sup> の名も同文書は示していたのである。

このような疑点はチベット史家の間で当然問題になる筈であつた。事実、L. Petech 氏は一九五六年既にこの点を取り上げて論じている。<sup>(6)</sup> それにもかかわらず、筆者は Thomas 氏の取り上げた同文書が文面通り文成公主に関するものであると確信して、むしろ積極的に利用した。理由は先の論文のうちでも散発的に示したが、三点にまとめることが出来る。そのうちのひとつとして公主と吐蕃王との会つた場所、続いて彼等の住んだ場所が問題になる。

彼等の出会いの場所を含む地名 *Tsai* が本論の主題として扱われるわけであるが、三つの理由の一部を本論で固める意味もあるので、先ず、*Petech* 氏の疑念を払うため、三つの理由をここに再び述べて見よう。

## 2 文成公主文書について

吐蕃王朝が唐朝から王妃として迎えた公主は前後二人で、この点は中国文献、チベット文献一般、それに唐蕃会盟碑を通じて疑いを挟む余地は全くない。従つて、*Thomas* 氏の示したチベット文書に見える文成公主が誤つて写されたとすれば、金城公主を元来示していたものとしなければならない。

金城公主は敦煌編年記<sup>(9)</sup>の記述によれば、七一〇年にチベットへ興入れをしている。即ち、

*btsan mo khon co gcegs pah yoyad bkral/ shan bTsan to re lhas byin la stsogs pas/ gñe bo bgyi ste/ btsan mo Kim ran khon co Ra sahi Ga tsal du gcegs/*

皇女公主が来られるにあたつて需用品が賦課された。尚ツェントレ・ヘジン達が介添え役を務め、皇后金城公主はラサのシャツェルに來られた。

とあることで明らかである。

旧唐書吐蕃伝には

景龍三年十一月、又遣其大臣尚贊吐等來迎<sup>レ</sup>女、中宗宴<sup>ニ</sup>之於苑内毬場<sup>一</sup>と示され、又、中宗本紀には、

蘇毗の領界 山口

〔景龍三年十一月〕甲戌、吐蕃贊普遣其大臣尚贊吐来逆<sup>レ</sup>女とあり、更に、

〔景龍四年正月〕丁丑、命<sup>ニ</sup>左衛驍大將軍河源軍使楊矩<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>送<sup>ニ</sup>金城公主入<sup>ニ</sup>吐蕃<sup>一</sup>使<sup>レ</sup>己卯辛<sup>ニ</sup>始平<sup>一</sup>送<sup>ニ</sup>金城公主歸<sup>ニ</sup>吐蕃<sup>一</sup>

とある。

以上の記事をまとめると、金城公主を迎えに赴いた shan b'tsan to re lhas byin<sup>(10)</sup> 等は中國曆で十一月に唐の宮廷に至り、翌年正月には楊矩を伴にした金城公主が吐蕃に出発している。彼女<sup>(11)</sup>は吐蕃曆の同年（七一〇年）に Ra sa の Ğa tsal に到着したわけである。七一〇年は大の年 khyi lo であることに注意したい。

しかし、Thomas 氏の扱った文書では、よしんば Thomas 氏が示した年次に従つて見ても、“Khyih lo sar”（≡ Khyih lo tshar）は「大の年が改つて」（Phag gi lo 猪の年になる）という意味のため、公主と b'san po の会つた年が今見たものとはくい違つてしまう。筆者は同氏の年次判断を全く却ける立場をとり、会見の年を六四〇年の鼠の年とするから、これを七十二年後のこととすれば、その年次は七二二年となり、七一〇年と重なり合う可能性を全く欠いてしまう。

先の拙論で立てた年次判断を覆した上、更に Thomas 氏の所説も一年前にもつていくことが出来た場合、再び考え直すことが必要になるであらう。

第二は、公主が b'san po と会つた場所である。金城公主は Ra sa<sup>(12)</sup> 即ち今日の lHa sa の Ğa tsal に到着し

た。その年、*bisan po* は(夏は) *Bal po* <sup>(13)</sup> に、冬は *Brag dmar* にいたと編年記<sup>(14)</sup>は示している。その先の年の冬も *Brag dmar* にいたのだから、公主到著の頃はなお多分そこにいて或は、*Ra sa* に赴いて彼女と会ったかも知れない。何れにせよ、この *bisan po* が河源、或は *rTsan yul* に赴いた形跡は全くない。文書の公主が *bisan po* と互に挨拶を交したところは *Tsogi Jon yo du* で、その後、彼等は夏冬ともに *Tsha god* <sup>(15)</sup> に住んでいる。しかるに、編年記では金城公主が *Ra sa* に至った後も、相手の *bisan po* はしばらく従前通り、先に見た *Bal po*, *Brag dmar* 以外の地に移動していない。

この初会地 *rTsan yul* については後程考察を試みるが、*Ra sa* の *Ca tshal* と同一でないことは既に瞭然としている。

第三には、二人の公主の夫々の婿になる *bisan po* が具えていた諸条件の相異が挙げられる。金城公主が *Ra sa* <sup>(17)</sup> に入つた年、多分 *Brag dmar* にいたと思われる *Khri lde gtsug rtsan* は、なおその頃 *rGyal gtsug ru* と呼ばれ、数えて七才の幼年であつた。その年齢に関しては、敦煌編年記の七〇四年<sup>(18)</sup>の頃に

*dpyid Kho bran tsal du rGyal gtsug ru bltam.*

春、コダランツェルにゲルツクル生る。

とあり、疑う余地は全くない。尤も、公主入蔵の年に僅か七才を数えるのでは如何にも常識をそれているので、新旧唐書の吐蕃伝では、「為贊普二時年七歳」(旧伝)とか、「為<sub>二</sub>贊普<sub>一</sub>、始七歳」(新伝)として、そのときの年齢を即位時の年にとつている。しかし、敦煌編年記によれば、明瞭に金城公主入蔵時がこの七才の時であるから、こ

れらは誤つて文を整えたものとか考えられない。<sup>(19)</sup>

政略結婚であり、要は公主を迎えて質に代えればよいのであつたことを先ず考えるべきであらう。事実、金城公主の場合も、rGyal gtsug ru の生れる以前から皇太后 Khri ma lod がその請求を唐朝によせており、早く来れば、父の Khri hdus sron の妃とする筈だつたのもあろう。金城公主の相手になつた rGyal gtsug ru が当時なお幼年であつたことはその居住した宮居が夏と冬に同じ二点を移動するのみであつたのを辿つてみてもわかることである。<sup>(21)</sup>

ところが、断簡が示す公主は六四〇年に bisan po と Tsog'i Jon yo du で会つ、その冬から Tsha god に pho bran を構えて夏もそこを離れなかつた。文面の前後から六四二年には leam khon co が Tsha god で出産したとさえうかがわれる。<sup>(22)</sup> 筆者の年次判断に従えば、六四〇年に公主と会つた bisan po は Gun sron gun brtsan で、当時二十才を数えていた。六四二年には二人の間に Man slon man brtsan が生れ、翌年、夫の Gun sron gun brtsan が歿したことになる。これらは断簡から窺えるところとも乖離しない。中国史料に従つても、贊普は文成公主を迎えに自ら栢海に現れ、婚礼をとつた上、中国の華麗な風を見て羞恥の状を示したという。

これらは七才の bisan po に一つとして可能なことではないと断言してよいであらう。

以上の理由から問題の文書に見える Mun gen khon co は、決して金城公主を誤つて文成公主としたものではないといえる。記事はまさしく文成公主その人について示したものである。

Petech 氏の示した疑念は Khri bans については同名異人、他の人々の場合、完全に一致する人名がないのと、

称号、異名には同時にさえ共通のものがあり、時を距てた場合には更にその可能性が増えるということ(23)で処理してよいと思う。

以上は先頃の小論で一応述べたところをまとめて繰り返したのに過ぎない。従つて詳細はその方で参照して頂きたい。

### c rTsan を含む Sum ru の位置

Thomas 氏が rBon yul と読んだ箇所を前論で筆者は rTsan yul と読み直した。rTsan yul と云えば、誰でも dBus, gTsan の gTsan を想うに違いない。(24)しかし、敦煌文献ではなお dBus, gTsan という呼び方はなく、翼の制度が漸く定著した八世紀に至つて dBus の一部を dBu ru 中翼と称しているのが見られるに過ぎない。その制度のもとでは今日の gTsan の北部は gYas ru 右翼、南部は Ru lag 支翼と呼ばれた。(24)

rTsan yul は今日の gTsan の呼称の起源になっているのかも知れないが、その沿革は明らかでない。ただ、後代の文献では rTsan と書べべき字も代りに gTsan と示されることが殆んどであるのと、西部の rTsan、例えば sPyi gtsan (sPyi rtsan), Yar gtsan (Yar rtsan) など(25)は Shan shun smad の千戸を夫々構成し、敦煌文書では括弧内のように示されるが、今日の gTsan の北部と連なつていて関係があるようにも思われる。(27)

問題の rTsan は、今引用した二つの rTsan の名称から推測すると、これらよりも東よりにあつたと思われる。(26) Shan shun smad は西から Gu ge, lCog la, sPyi gtsan, Yar gtsan, Ci di の各千戸から成つてゐたと dPa ho

gtsug lag hphren ba は述べつつゑ。sPyi は「外側」を意味し、Yar は「高い方」で、具体的には chab gyi ya<sup>(63)</sup>  
 bgo<sup>(62)</sup>「水の源」即ち Kailāsa, Gans Ti se よりいづれを指示しつつゑ。

Shan shun smad をチベット本土と双方から挟むものとして北には Yan lag gsum pañi ru 支部第三翼<sup>(62)</sup> いわゆる Sum ru なる翼が設けられ、その北は rTse mthon, Po mthon, rGod tshan stod, rGod tshan smad 等の千戸があつたところ。この場合の rGod tshan は rGod gtsan とは示されていないが、敦煌文書では、rGod tsan としめられてゐる。rGod tshan の位置はほぼ明らかで、今日の gTsan とは明瞭に離れたところにあつた。そのため gTsan と結びつけた rGod gtsan という書き方を免れたのであらう。

この他 Nag gtsan などの称もあるが、恐らく Nag rtsan であつたに違ふなうと思われる。<sup>(32)</sup>

この rGod tshan を sde に含む Yan lag gsum pañi ru は sTon khyab (Thon khyab/mThon khyab), rGya を内に含む一万一千戸であるとされるが、その場所は今日のチベットのどの辺の処に位したのであらうか。

dPaḥo gtsug lag hphren ba の与ゑる Sum ru の境界は次のようである。

東端 gÑe yul Bum nag

南端 Smrti Chu nag

西端 Yel shabs sDins po che

北端 Nags god gZi hphran

中心 rGya god sTag pa tshal

このように地名を与えられながら、実は、殆んど為す方法を知らない。東方の *gNe yul* といつても全く知られるところがない。ただ、*rNags* が後代では *gNags* <sup>(61)</sup> と示されるので、この方面に臆測したくなるのに留る。南の方は *Smriti Chu nag* であるところが、これも何処を指したのか勿論わからない。ただ、この地は同時に *g-Yas ru* <sup>(36)</sup> の北端であつたことが同書によつて知られてゐる。*g-Yas ru* の中心は *Gans* の *Shon pa tshal* であつて、*dBu ru* の西はこの翼は並んでゐた。*dBu ru* の中心は *Ra sa* (*IHa sa*) の *Ra mo che* であつた。<sup>(36)</sup>

*dPa ho gtsug lag hphren ba* の記述のうちをを理解しようといふ点では *dBu ru* の北端が *Prags kyi glan ma gur phub* であつたことが同時に *g-Yas ru* の東端を成してゐたとされることである。これだけでは、単に、*g-Yas ru* の東隅が *dBu ru* の西北に喰ひ込んでゐたことになるが、これらの北に横たわる *Sum ru* の南端が *g-Yas ru* の北端と、*Smriti Chu nag* で接してゐたともなつてゐるので説明の筋が通らなう。常識的には、*g-Yas ru* の北端として示される *Smriti Chu nag* は *g-Yas ru* の東端 *Prags kyi glan ma gur phub* より北にあつたと解されるわけだから、*Sum ru* の南端も当然より南にあつた *Prags kyi glan ma gur phub* でなくては正確には意味が通じなう。恐らく、*g-Yas ru*, *dBu ru* の夫々の北端がほぼ同じ程度に北に寄つてゐると認識されてゐたことを示すのであらう。<sup>(88)</sup>

西端の *Yel shabs sDins po che* も所在が不明である。この翼とチベット本土との間に *Shan shun smad* <sup>(89)</sup> が挟まれてゐたといふから、西端は *Shan shun smad* の北にあつたと思ふことで満足しなればならない。

北端は Nags god gZi hphran だといふ。Nags god は中国文献に見られる納克書、納哈<sup>(90)</sup>暑<sup>(91)</sup>、Nag chu が dNul chu と呼ばれる以前の上流域を指すが、gZi hphran の地は全くわからなう。

中心地として与えられる rGya god sTag pa tsal を大胆に今日の rGya mdah<sup>(92)(93)</sup> に近い地域に想定しておきたい。全くの臆測ではあるが、dBu ru の東端が Hol kha<sup>(94)</sup>、g-Yo ru の東端が Koh yul Bre snar<sup>(95)</sup> である、積極的にこの想定を妨げるものがない。

以上のことから、rTsan (rGod tsan) を含む Sum ru を漠然と Shan shun smad, g-Yas ru, dBu ru, g-Yo ru の北に拡がる地域と見とどけたわけである。その南端が g-Yas ru の北とみれつゝる、<sup>(96)</sup> Sum ru の南縁の線が傾いているとしても、西の方が南に下つてゐることになるのを記憶しておきたいと思ふ。

#### 4 Khyun po の gTsan smad と Nan po

rTsan そのものについては、敦煌文書によつてかなりのことが知られる。<sup>(97)</sup> dPa'ho gtsug lag hphren ba<sup>(98)</sup> Sroñ btsan sgam po 時代の諸侯の支配地として dban ri beo bryad 「十八領区」なるものがあつたと示してゐる。<sup>(99)</sup> その中には

gTsan stod gTsan smad hBro dan Khyun pohi yul

高地 gTsan と低地 gTsan は hBro 氏と Khyun po 氏の国

といふ一項がある。尤も「十八領区」の全部をよく見ると、その成立は明らかに Khri sroñ lde brtsan 代のもの

であつて、先の拙論で主張したように二王の混同から Sroñ btsan sgam po の項にもつて来られたものと考えられる。<sup>(42)</sup>

この gTsañ stod, gTsañ smad の gTsañ は rTsañ に他ならないのであるが、これは後程次第に明らかにするであらう。

Khyuñ po 氏については、幸いに敦煌文書がかなり詳細な記録を留めている。<sup>(43)</sup> Khyuñ po 氏は sTon 氏と共に<sup>(44)</sup> Shan shuñ Dar pa の主 Lig sñā gur の blon 大臣であつた。Dar pa は古代チベット史上重要な名であるが、今日の hDar ba' hDar ba rdzōñ の附近と考へてよいであらう。又、敦煌に駐屯した Dar pañi sde' 「絲綢部落」<sup>(45)</sup> もこれであつたと思われる。Lig 氏の居城は Khyuñ luñ dñul mkhar (rdul mkhar)<sup>(46)</sup> と称れる。有名な mTho luñ の南東に今日でも Khyuñ luñ といふところがあるが、関わりのある地に違ひない。Khyuñ po 氏はその姓をこの Khyuñ luñ から取つてゐるのもさう。ただ、Khyuñ po 氏自身が Khri sroñ brsan 時代に拠つてゐた Khri boms の地が何処にあつたかは不明である。<sup>(48)</sup>

しかし、先程見たように、Khyuñ po の所領は gTsañ smad である。これが北方の rTsañ smad と同じになれば、原籍と大変離れた場所にあつたことになる。この点を明らかにするため、敦煌文書によつて Khyuñ po の賢者 sPuñ sad zu tse が吐蕃王朝に尽した功績から調べて見よう。<sup>(51)</sup>

rgyal po hai (Khri slon htsan) hi rin la// Khyuñ po sPuñ sad kyis rTsañ Bod kyi rje bo Mar mun ngo bchad de// rTsañ Bod khyim ñi gri// btsan poñi phyag du pul te// Zu tse glo ba ñe ho// hun

nas btsan po slon btsan gyis// rTsañ Bod khyim ñi gri// Zu tse blo ba ñe bāhi bya dgahr stsal to//  
 王の治に<sup>レ</sup> Khyuñ po sPuñ sad せ rTsañ Bod の 王 Mar mun の 首を<sup>レ</sup> rTsañ Bod に 二万戸を贊  
 普の御手に捧げ、Zu tse は忠誠を示した。その後、贊普 slon btsan は rTsañ Bod に 二万戸を Zu tse が忠誠  
 を尽した褒美に賜わした。

と Khyuñ po が <sup>(82)</sup>rTsañ Bod に 二万戸を領するに至つた次第を示してゐる。

<sup>(82)</sup>宰相記と<sup>(83)</sup>めうくべき敦煌文書とを

dehi hog du Moñ khri do re mañ tshab kyis byaste// hdzans kyī tshad ni// rTsañ Bod kyī jo bo Mar  
 mun brlags te// dkuñ ched po blod pañi tshel//.....

その後、Moñ khri do re mañ tshab は (宰相を) 務めたが、その賢明の程は rTsañ Bod の 王 Mar mun  
 が壊滅され、大策を献じた際.....

と<sup>(84)</sup>めつて、その時 Moñ が <sup>(85)</sup>論語 blon che に<sup>(86)</sup>めつたことを記してゐる。Moñ は sKyī ro ljan shon の 王で、他の  
 文書では rMañ po, rMoñ pa など綴られてゐる。Ston btsan sgam po の 妃で、Guñ ston guñ btsan の 母と  
 なつた Moñ za Khri mo mñen ldon stēn は<sup>(87)</sup>めつた<sup>(88)</sup>の<sup>(89)</sup>系統の<sup>(90)</sup>王で<sup>(91)</sup>めつた。この Moñ は<sup>(92)</sup>めつた<sup>(93)</sup>へ  
 に滅せられる。

puñ gi hog du btsan po mched gñis la// Moñ shon po glo ba rins pa/ Zu tse glo ba ñe bas dkuñ bel  
 nas// btsan po mched gñis kyī sku la ma dar par// Moñ shon po bkum ste// Zu tse glo ba ñeño//

その後、贊普兄弟二人に対し、Mon shon po が忠誠を失ったが、Zu tse は忠誠であつたため手をつくして贊普二人の御身に災の及ばないようにし、Mon shon po を殺した。Zu tse は忠誠を寄せた。

この場合の贊普兄弟とは slon mtshan (btsan) と slon kol である。その後 btsan po の同族 Dags po lha de<sup>(68)</sup> の討伐があつて Sen go mi chen や rNags が活躍し、Myan が重用され、Khyun po は必ずしも志を得なかつた。彼 Pun sad は rTsan Bod 二万戸を頂きながら不満をもちたのであつた。一日、宴席で彼は歌つた。<sup>(69)</sup>

Mon khahi ni stag chig pa/ stag bkum ni Zu tses bkum/ guñ bkros ni pyag du pul/ sla lvo ni lHo  
 rNëgs stsal// rTsañ brañ ni Ya stod kyì thañ prom ni rgod ldiñ bañ/ rgod bkum ni Zu tses bkum//  
 rgod gcog ni pyag du pul/ gsab gsab ni lHo rNëgs stsal// na niñ ni gshe niñ sna// Ti se ni gañs druñ  
 nas// ça dañ ni rkyañ byer ba// Çam po ni stsa la byer// di riñ ni sañ lta na/ Çam po ni gñan gyi  
 rtsa// ça rkyañ ni chas ma ñan/ ça rkyañ ni chas ñan na/ Ti se ni gañs kyì brun/.....

lHo rNags ni hphan gyi snon/ Se Khyun ni hphan gyis brab// sña na ni hphan ba la/ da tsam ni  
spyen yan yas/ dbu pyin ni gro bo la/ tha ma ni g-yagis bskord//

Mon kha の一匹虎、その虎を殺したのはこの Zu tse がやつたこと。最も大切なところは御手にさし上げ、  
 sla lvo は IHo や rNegs に賜わつた。rTsan の徒は羊同の雄にして prom (酪) ともしうべきは天翔ける  
 鷲、その鷲を殺したのはこの Zu tse がやつたこと、鷲の翼は御手にさし上げ、その他のところは IHo と  
 rNegs とが頂戴した。去年より一昨年は前、(その昔はずつと) カイラーサの雪のほとりで跳びまわつていた

鹿と野馬とが、そこから（今は）シャムボの麓に（きて）跳びまわっている。（この先）今日も明日もずっと（<sup>68</sup>）いかめしいシャムボの麓にとどまつて鹿と野馬とは立ち去ることが出来ない。<sup>(146)</sup> 鹿と野馬とのわけまえがよくないとき、カイラーサは（ことさらに）雪に輝いて見える。

Ho と rNegs とは実益が加えられ、<sup>(69)</sup> Khyuñ は報酬として Se と領地を分け合つた。<sup>(68)</sup> 昔に手柄をたてておれば、今に至つても思召がよい。後についていつただけのものに果てはヤクでとりまかれる程めぐみがあるよ。と、Khyuñ po は可なり思い切つたことを云つたので、贊普は Ho か rNegs の誰かがやり返そうと思わねばよいがと願つたという。その時、隅に引込んでいた Myañ Shañ snañ を見つけて Khyuñ po はお前も歌えといった。Myañ はそれをうけて、Khyuñ po の考えが誤つてゐると歌い、Khyuñ po のような信任の篤い「針」で信じがたいもの共に「糸」を通してつなぎとめているのだとさように答歌のしめくりをつけた。それで贊普にいたく気に入られ、blon che 論臣になつたと話は閉じられている。<sup>(71)</sup>

Khyuñ po は、カイラーサのある Shañ shuñ から来て Yar lha gam po の麓にゐる bisan po 贊普に仕え、大功を立てたが、いつの場合も王朝創興の功臣 Ho と rNegs とが甘い汁を吸つてゐると感じていた。彼等はうまみの多い報酬をうけるが、自分は故地を離れたところに封地を宛てがわれ、つい嫌になつて故郷カイラーサの雪で輝く姿が懐かしくなると嘆いたのである。

ここで見るように Khyuñ po は Mon を伐ち sla (gla) lvo を従へつゝ rTsañ の徒は半同 Ya stod の雄で、その中核をなすのは rGod Idins であると云い、自分がその rGod Idins を敗つたことを自慢する。彼は、

他の文書によると、この他、後に北の Shan shun の To yo chas la を破つて btsan po Khiri ston btsan に捧げているが、<sup>(72)</sup>これは別の機会に論じたい。

以上で、Khyun po の領した gTsan smad は今日の gTsan と離れた rTsan smad であるとするものの疑念はやや除かれたと思う。

Khyun po Pun sad zu tse はその後叛心を起し、mGar sTon rtsan yul zun に気づかれると、自殺し、その子の懇願により、<sup>(73)</sup>Khyun po 氏自体は断絶を免れたと敦煌文書は示している。

そして、Khyun po 氏の領した rTsan smad に戻るが、一体何処だったのであらうか。極く新しい著作であるが hDzam glin rgyas bçad に <sup>(74)</sup>འདྲེང་པ་

yan Nan po hi yul nas çar du la gcig rgyab ste son ba na Khams lHa ri mgo zer ba yod/ de nas çar dan byan du lCags ra dpal hbar/ rGyal ston/ Khyun po dkar nag ser gsum sogs yul groñ hbrog hñdres mahi sde man po yod pa phal cher gshun sde yin la/ Khyun por dGe lugs pañi dgon khag bryad dan Khyun po gTñ chen zer ba sogs bon poñi dgon khag man po yod/

また、Nan po の国から東に峠を一つ越えてつづくと Khams lHa ri mgo <sup>(75)</sup>འདྲེང་པ་がある。それから東と北に lCags ra dpal hbar、<sup>(76)</sup>rGyal ston、<sup>(77)</sup>Khyun po 白・里・黄等三つの国があつて町に住むものと遊牧するものとが混じり合つた集団が沢山ある。しかし、大部分政府に所属する集団である。Khyun po には dGe lugs pa の八か寺があり、<sup>(78)</sup>Khyun po gTñ chen と称するものなど Bon po の寺院が沢山ある。

とある。右の *Iha ri ngo* は今日の拉哩<sup>(75)</sup>（拉里）である。東にある *lCags ra dpal hbar* は多分、邊壩<sup>(76)</sup>で、*rGyal ston* は哲羅塘<sup>(77)</sup>に当ると思われる。*gTin chen* は「書<sup>(78)</sup>でよく有名なところである」。Shan shun は Bon 教<sup>(79)</sup>とゆかりの深いところであり、Khyun po 氏が移住したところに多くの Bon 教寺院が見られることは理由のないことではない。この *rTsan smad* とは書<sup>(80)</sup>つてないが、これからその点を見よう。

注目すべき点だが、これらの地が *Nan* に東接しているところである。一般に *Nan* とは「南」であり、は今日の *gTsan* を略<sup>(81)</sup>して *Shigatse* (*bkra cis lhun po*) の *gN* *Myan smad* *Gyantse* (*rGyal mkhar rtse*) の *gN* *Myan stod* を考へた<sup>(82)</sup>。これらの *Myan* の *Nan* と屢々綴られるが、今、問題になっている *Nan* の方も後で見るように敦煌文書<sup>(83)</sup>では *Myan* として示される。

とて角、我々の *Nan* の位置を調べて見よう。*hDzam glin rgyas* <sup>(84)</sup>*bcad* は次のように述べる。

gon *gsal Hol kha dan dBus stod sogs nas car dan car llohi phyogs su son ba na Nan pohi yul yod der shon du khyim tshan ston phrag man po yod pa den san stons nas byu phrag hga las med……*  
*Nan pohi lun mdar Kon pohi yul yod……*

先に説明した *Hol kha* と *dBus stod* などから（夫々）東と東南方面にいはば *Nan po* の国があり、そこには昔住居が数千戸を数える程沢山あったが、今は空しく数十戸を数えるしかない……*Nan po* の下手の山合に *Kon po* の国がある……

とて *Phu mdo* <sup>(85)</sup>旁多の東の *hBri gun* <sup>(86)</sup>などを含む *dBus stod* <sup>(87)</sup>の南東、*Hol kha* <sup>(88)</sup>の東にあるところ、*Kon po* の



その他の問題<sup>(88)</sup>はこゝで論じなうとするが、sTsan stod sTsan を rTsan stod rTsan の異態として、先に見た hBro 氏の領有したところ gTsan stod (rTsan stod) と重なるものに見つふと思ふ。こゝが Nan po であるからその東にあつて、Khyun po 氏の後裔が住んだと見られる地域こそは既に見た gTsan smad (rTsan smad) の中に含まれると考えつ大過なうであらう。この gTsan smad/rTsan smad は Khri sron lde brtsan 代の Khyun po の所領であつて、その全盛時代に領した rTsan Bod の一部であるとしなければならぬと思う。先に、Yan lag gsum pañi ru (=Sum ru) とつて rTsan がその中に含まれると見做しておいたが、我々の今調べた Nan や Khyun po 氏の移住地の近くには Sum mdo という地名が今日も可成り多く残つてゐることに注意して置きたう。又、Sum ru の中心 rGya god が rGya mlañ<sup>(89)</sup> から遠からぬ地域にあると見ておいたが、今日の rGya mlañ は Nan po の東南隅に位を占めてゐるこゝを併せて想つて出して置かう。

### 5 Sum ru の東部 gNe Yul と rNags

Sum ru の東部 Nags god gZi hphran とつて大なる諸部をなしたが、その Nags god と同じと見なせる Nag god とつて hDzam gliñ rgyas byad など<sup>(90)</sup>

Nag chu sogz nas çar lhor Nag god zer bañi sde ñañ/ Nag chubñi çar du A grags/ rDza mar/ Sog sde sogz hbrog sde mañ po ñañ/ de dag gi çar du hBroñ pa/ dGe rgyas/ rDor çus/ gliñ stod ma/ Pe ri kha hga ñañ/ Yos çus/ Rog çus/ sTag rañ/ Ho thog/ Gohu tsha/ Moñ gul cin/ Na msho/ dGe rtse

sogs hbrog sde mañ po yod/

Nag chu <sup>(86)</sup> などから東南<sup>(86)</sup>に Nag god という集団と Nag chu の東<sup>(86)</sup>に A grags, rDza ma, Sog sde など<sup>(86)</sup>の遊牧民集団が沢山あり、又、それらの東に hBroñ pa, ……等の遊牧民集団が沢山ある。

という記述がある。

Nag god は Nag chu (地名) の東方<sup>(86)</sup>をいって、IHa ri (mgc) 拉里の北方地帯と考えてよい。Nag chu (河) の岸に、今日の地図では那克雪比魯 Nag sho Bi ru <sup>(86)</sup> という地名を見ることが出来る。それより西北に寄つたところ<sup>(86)</sup>で阿塔克米馬爾 Atak Memar<sup>(86)</sup> 索克宗 Sog rdzon<sup>(86)</sup> 索克瑪郎などの地名がある。又、部族集団として Nag god 三十九族という名が知られているけれども、三十九族と示される場所が今日の地図にはあり、索克宗の東北に当つてゐる。

これらに東接し、Khyuñ po の地の北に住む部族の名が今しがた引用したところに見えている。それらのうちで中国側の資料<sup>(86)</sup>と照合せられるものを並べてみると次のようである。

| dGe rgyas            | 格 吉 (四) 族 | 格 爾 吉 (四) 族<br>(哈 爾 受 族) |
|----------------------|-----------|--------------------------|
| rDor gus (rNor gus?) |           |                          |
| Pe ri kha hga        |           | 烏哈那哈地方白利族                |
| Yos gus              | 玉 樹 (四) 族 | 玉 樹 族                    |

|             |           |           |
|-------------|-----------|-----------|
| Rog gus     | 拉 休 族     | 阿 拉 克 領   |
| Gohu tsha   | 固 察 族     | 固 察 族     |
| Mon gul cin | 蒙 古 爾 津 族 | 蒙 古 爾 津 族 |
| N'a mtsho   | 娘 薩 族     | 尼 牙 木 錯 族 |

右表に示さなかつたもののうち、*glin stod ma* <sup>(四)</sup>は、*glin bar ma* <sup>(四)</sup>に  
 近く、*Idan khog*, *Iga khog* <sup>(四)</sup>などと共に、*hDzam glin rgyas bcad* <sup>(四)</sup>に示してゐる。

第二段に利用した中国資料の西寧府新志は清朝時代のものであるが、そこに、*玉樹 Yos gus* 納克書 Nag god  
 等処番人としてこれらの他にもなお多くが記されている。特に、次の一句は

住牧阿拉克地方隆布族、距固察族、一百六十余里、百長三名、番人二百一十三戸。

住牧上隆布族、距阿拉克隆布族三百余里、百長一名、番人七十六戸。

先の *glin bar ma* (阿拉克隆布) と同 *stod ma* (上隆布) に相当するものを示すと考えられるため重要であ  
 る。阿拉克は明らかに *rNags* に相当する。そのことは阿拉克が *Rog* を指し、*N'a* が尼牙で現わされているこ  
 とから承知できると思う。つまり、阿拉克隆布は *rNags klum po* の対音である。

敦煌文書では、

*rNags kyi gru bshi* (P.1286, 1290), *sMo gru bshi* (P.1285), *Se mo gru bshi* (P.1060), *Sro mo lün*

sum (P.1039) <sup>(87)</sup>sum

La bran (P.1286, 1290), Lin bran (P.1060), glin brag tshetu (P.1039), glin hbran tshetu (AFL),  
glum hbran tshetu (P.1285)

が <sup>(88)</sup>glin tshetu (tshetu)/brag tshetu <sup>(89)</sup>brag tshetu, brag chahi と綴られているが、大体後代の文献に見られる <sup>(90)</sup>dran rje/dan rje と同じ意味であると思われる。これら <sup>(91)</sup>rNags の主が Lin/glin/glum の王と称していたことがわかる。隆布は <sup>(92)</sup>glin の異称または異態の glum/klum に po を附した形と筆者は見る。これと関連する地名の隆布は玉樹のすべ南にある。<sup>(93)</sup>

rNags が後代のチベット文献で <sup>(94)</sup>gNags と写られていることは周知のことである。先に見たように <sup>(95)</sup>Sum ru の東端は <sup>(96)</sup>gNe yul Bum nag である。この <sup>(97)</sup>gNe yul <sup>(98)</sup>gNags と <sup>(99)</sup>rNags の異態であると考えてよいように思う。即ち

rNags/rNags/rNags/gNags/gNag

の変遷過程の一部を示しているものと見て、<sup>(100)</sup>rNags から <sup>(101)</sup>gNags に移る間に、<sup>(102)</sup>gNag/gNe が派生したと考えられるのである。

Bum nag の所在は不明のままであるが、<sup>(103)</sup>Sum ru は、後に Sum ru の周辺部族の所在を見ればわかるように玉樹附近を東境としていたらしめ、<sup>(104)</sup>Sum mdo 松多、<sup>(105)</sup>蘇木多を伴った地名がこの辺に夥しく現れ、ここを境に消えてしまうのが目をひく。

ここに加えて置きたいのは、*glin tshan* <sup>(108)</sup> 靈蔵という呼び方が明代の中国資料に見えること、つまり、*glin* に *tshan/rtsan* がつけられた形でこの辺が呼ばれていたことである。*rNags* の *glin* (*gNe yul*) が *Sum ru* の東端をなし、*rNags klum po* 阿拉尼克隆布として痕跡を示すばかりか、明らかに *rTsan* とのかかわりも露わしていることはこれまでの *rTsan* が *Sum ru* に含まれるという解釈を一步進めることが出来ると思う。<sup>(109)</sup>

右に見たところで明らかなように、*Khyun po* の後裔の居住地区のみを *gTsan smad/rTsan smad* の全体と考えてはならない。更にまた、*Khyun po* が制覇した *rTsan Bod* の *rTsan* は必ずしも *Sum ru* の境界で限られていたというでもない。例えば、*Khyun po* の降した *rGod ldim gyi sde* の名が古文書断簡に見えているが、*Sum ru* の *sde* <sup>(86)</sup>には含まれていない。そこで、*Sum ru* にその一部が含まれていたという *sTon, Khyab, rGya* を手がかりにして *Sum ru* の外に出ている *rTsan* に及んで見よう。

## 9 Thon, Khyab, rGya と rGod

*Thon Khyab* は後代のチベット文献では稀にしか現れないが、<sup>(108)</sup> 多く *sTon khyab* と綴られている。*rGya* は一般に *Mi nag* の *rGya rGod* として知られている。<sup>(121)</sup>

敦煌の漢文書では *Thon khyab* は通類<sup>(109)</sup>と綴られ、同チベット文書によつても、*sde* として独立にも編成されているが、<sup>(11)</sup> *dPaho gtsug lag lphren ba* によれば、*Sum ru* のうちにも混入しているのでその周辺にいた部族といえる。また、*Thon* と *Khyab* とは後に見る *rGya, rGod* と同様、夫々別の部族であつたと考えられる。

「西寧府新志」<sup>(38)</sup>には玉樹附近の番族として、

住牧東提地方阿里克族、郡城南七百余里、百戸二名、百長九名、番人九百一十九戸。

住牧扎苦地方雍熙葉布族、距<sup>三</sup>阿里克族四百余里、……住牧蒙古爾津地方蒙古爾津族、距<sup>三</sup>雍熙葉布族五百余里。

として東提地方にいた阿里克族と扎苦地方の雍熙葉布族のことを伝えている。「衛藏通志」卷十五では雍希葉布族は蒙古爾津族と一緒に言及されている。<sup>(39)</sup>

阿里克は<sup>h</sup>Dzam glin rgyas bcad y<sup>4</sup> rMa chen spom ra の東北にいたと伝えられる A rig 族である。<sup>(40)</sup>その所在地東提地方、即ち sTon sde (同德)は中国資料で千戸族と伝えられる部族にゆかりの地であろう。雍熙葉布、または雍希葉布は恐らく Yos khyab の対音で、東提の西<sup>4</sup> Yos gus (sKye dgu mdo) 玉樹の東、今日の竹節方面に拠っていた部族であるが、扎苦の地名を確かめることは出来な<sup>4</sup>。

sTon sde y<sup>4</sup> dPa ho gtsug lag hphren ba の伝える「十八領<sup>(42)</sup>」のうちで

<sup>h</sup>Phan yul sTon sde sGro dan rMa yi yul

<sup>h</sup>Phan yul y<sup>4</sup> sTon sde y<sup>4</sup> sGo 氏 y<sup>4</sup> rMa 氏の国

と示される sTon sde y<sup>4</sup> rMa y<sup>4</sup> rMa chen spom ra を聖山としていた部族であろうから、問題の東提地方と一致する。勿論、「千戸」を意味する普通名詞ではな<sup>(41)</sup>。

sTon sde と共に示される <sup>h</sup>Phan yul は今日の <sup>h</sup>Phan yul ではなく、Nas po y<sup>4</sup> tshab y<sup>4</sup> dGu gri zhi po

ne がかつて支配した土地である。<sup>(116)(117)</sup> Nam po 或は gLin に接し、Ha sha の西南方にあつたと思われる。<sup>(118)</sup>「十八領区」の記述とその傾向から見ても、東は sTon sde に接していたということが出来よう。その地に拠つていた部族名が bSe/Se<sup>(119)</sup>であつたことは敦煌文書の諸記録から推察される。

沙州に駐留した sTon sar gyi ston sde 悉董薩部落なるものが敦煌文書によく見えるが、この東提に関係があると思われる。sTon sar は sTon pa sar ma の略と考えてよいであらう。

Stein 資料断簡に Thon khyab Se ton pañi sde とするものがいくつもあり、その一つに Se ton を消して Thon khyab のみを残したものがあつた。<sup>(120)</sup> Se ton pañi sde になく、Thon khyab であると改めたのか、Thon khyab のうちに Se ton pa があつたことを示しているのかはつきりしなうが、hPhan yul の Se へ Thon/sTon pa の混成した一団を呼んでいるものである。sTon pa は後に見るように「洞巴」族<sup>(121)</sup>として中国資料にもはつきり現れる。敦煌編年記七五五年の条に“sTon sar ston sde [g]sum gyi ston dpon bskos”[sTon sar 千戸三の千戸長を任命した。]と特に記すところがあるから、この頃新設されたのかも知れない。

「北史」や「隋書」の「附国」伝に附国と吐谷渾の間にある部族として當迷、渠歩が挙げられている。當迷は Thon nyi を、渠歩は Khyab を示すものであらう。

また、當迷は多彌と新唐書に示されるものであるとすれば、犁牛河 hBri chu 流域にいたものである。<sup>(122)</sup> rMa chen spom ra の東北麓、或は東提地方、更に、その南方の sTon skor 地方<sup>(123)</sup>も含めて、いずれもこの河の東方に当る。中国資料で「玉樹四十族」の中に数えられる洞巴族<sup>(124)</sup>だけはむしろ hBri chu の西南に位置を取っている。彼等の古

い活動領域を反映するものというより、吐蕃に帰順した一党の難磨<sup>(108)</sup>の残党が洞巴として名残りを留めていると見るべきかと思われる。Thon<sup>(108)</sup> myi と sToñ pa が全く同じかどうかは問題であろうが、両者の活動地域が一致すると思われる以上、少くとも、互に重なり合うところが多かつたとしなければならぬ。

さて、Khyab に戻るが、既に見たように古くは渠歩として単独に現れている。雍熙葉布、または雍希葉布も恐らく玉樹族 Yos çus 等の Yos と結びついた一団の名 (Yos khyab) であつて、結びつかない一党の名は蒙古爾津から竹節族が分出する際、行動を共にし、更に歇武族 (Khyab) として竹節族から独立したものと見とけられる<sup>(111)</sup>。同様に、歇武族の南東にある石渠は bSe/Se と結びついた Se khyab の対音を示すものと見てよいであろう。

「通典」一九〇、辺防、大羊同の項に王姓姜葛という一句が示されている。これを Khyab rgod の対音と考えてはどうであろうか。大羊同は元來 Ya stod の東部地方を指したのである。ただ hBrog mo nam gsum の主 Se の blon po (大臣) に rKyan というものがあり<sup>(116)</sup>、これが姜の対音に当てられてもよいが、今、rKyan について知るところが少いため、こころみに姜に Khyab の音を求めて見たものである。

以上のことから、Khyab を Thon と同様に独立の部族名として抽出することが出来たものと思う。

rGya<sup>(124)</sup> については、既に独立に名が挙げられているのだから、分離する説明はいらないであろう。中国資料によれば、玉樹四十族中に洞巴族に近く格吉三族というものがあつた。(本文二〇頁参照) 格吉は hDzam glin rgyas bpad と<sup>(127)</sup> dGe rgyas 族<sup>(128)</sup> である。dGe の方は dGe rise, sDe dge, mDzo dge, dMu dge に含まれているから、複合部族名の構成要素としてとりあげても問題はない。rgyas は rGya と、発音、表記法に相違はあるが、Thon,

Khyab に接するかなり大きい部族であり、Sum ru に加わつた rGya と最も名が近いので考えてみた。また、納克書 Nags god 三十九族について rGya sde としう称があることも知られているが、<sup>(126)</sup>この方は確実に rGya との関わりを示すものである。

今日の地図では、拉里 lHa ri の南に江達 rGya mdah としうとじうがある。この rGya mdah と遠く距るまいと思われのが昔 Sum ru の中心地であつた rGya god sTag pa tsal とせう。rGya god の名は古典時代の rGya god Ban mkhar 寺のうふにこそあられ、その住持の名に sTag phu 出身者二人を数えることが出来る。<sup>(127)</sup>  
Vaidurya ser po とよれば、同地域の rNod A rig than (阿力寺) や lHa ri mgo (拉哩) bDe chen glin' sTag ldan ri bo dpal hbar (邊壩) にせう sTag phu 出身者が創建者乃至住持となつてゐる。sTag phu せう sTag ldan の sTag と共に sTag pa tsal の sTag と関係があるに違いない。これらはすべて拉哩と同緯度上の東にあり、碩般多(碩板多)の西にある。<sup>(128)</sup>

これに対して rGya mdah せう Nain po せう Kon po とに挟まれた Lon の地、即ち klum ya gsum の一部をなし、今日の江達がその境界の名残りを留めるものと考えられる。<sup>(129)</sup>とすれば、rGya の領域ははなはだ klum ya gsum と重なるものになる。昔、Zin po rje sTag skya bo の所領であつたこの地は Yel rab sde bshi (dBu ru に含まれる) に続き、sTag skya bo せう Nen kar rin pa に住んでゐた。彼は、敦煌文書で暴君としてのみ説明されているが、その国は吐蕃王朝成立以前に吐蕃本土の重要な一部を領有する大国だつたことは確かである。こうした点からすれば、sTag skya bo の sTag せう sTag pa tsal の sTag と関係があるようにも思われる。

この sTag skya bo の一党は Zin po rje Khri pañs sum に討たれ、その領土はいつて吐蕃の支配下に置かれ、それから更に、領主の交替 (Nam pañ bu gseñ ti, Khyuñ po Puñ sad, hDru, Phyuḡs mshams) を見た。多くのものは、吐蕃本土を遠ざけて東遷することを余儀なくされたに違いない。一部のものを残して吐蕃に抗した輩は、今日の rGya ron 方面に移り、そこで rGya と呼ばれ、rGod と複合していため rGya rgod とも稱したのである。筆者は rGya 一般について、右のような事情を考えている。<sup>(137)(141)</sup>

rGya は Thon, Khyab と共に、いずれも Sum ru にその一部を吸収されたが、夫々独立に Sum ru の外にも拡いていた。Thon khyab, sTon pa, Se ton, Se khyab, sTon sar、更に、Khyab rgod (rKyañ rgod? 姜葛) も含めてよいだろうが、後に唐古特と呼ばれる党項 IDon rgod (Thon rgod?)<sup>(138)</sup>、或はこれと重なる関係にある rGya rgod 等がそれである。ただ、rGya rgod の拠いたところとは、たとえ rGya ron に限っても、他の例と異りいさじく Sum ru を離れている。しかし、rGya は既に見たように、また、rGod はこれから見るようにその明らかな痕跡が Sum ru の内外に残されている。

Thon, Khyab とその系統は Sum ru の東域に連なり、rGya は、dGe rgyas をなす rGya god, rGya mdab, rGya sde のみを考慮し、sTag skya bo の一党に rGya の名を託され、Sum ru の南部を構成していた主力になる筈である。しかるに、この rGya が Thon, Khyab と同様にただ一部が Sum ru に含まれるとするのは、異成立当時その主力が既に東遷してしまっていたことを裏書きするものである。

とゆえに、Thon rgod, Khyab rgod (rKyañ rgod), rGya rgod は Sum ru の内外に Thon, Khyab (rKyañ),

rGya が rGod<sup>(89)</sup>と複合した部族であるといえる。

Sum ru に含まれている rGod llin, rGod sar ʼ Sum ru のうちある rGod tshan (/tsan) も同様に複合部族であるとされよう。rGod ldiis の lDiis が Sum ru の西端と Shan shuñ smad の北側にあった Yel shabs sdins po che の sDiis (/Diis po tshe/lDiis bran tshe) であると、元来の rGod ldiis が Sum ru の西寄りの北側の位置に複合部族として成立するであろう<sup>(89)</sup>。

rGod tshan は sYi gtsan, Yar gtsan の内側にある Tshan である。rTsan stod, rTsan smad といわれるのは前者のうちにある。sTsan stod sTsan の王は Phyyah<sup>(18)</sup> であった。若し rGod が Myi ñag (rGya rGod) に見られる Sehu (蘇)姓であるとすれば、rGod tshan の本名の複合部族名は Sehu phyyah/So phya/So bya = Supiya/So byi となり、『蘇毗』の対音となり、その成立の意味を説明することが出来る。

蘇毗本西羌族、為吐蕃所并、号孫波、東与多弥接……(新唐、西域)

つまり、吐蕃に併合されて後<sup>(18)</sup> Yan lag gsum pahi ru として組織され、それが Thon myi の西方にあつたことを示しているわけである。逆に云えば、我々の見つけた Yan lag gsum pahi ru の東端が多弥に接し、bBri chun で限られるということに証言を加えるものになるのである。

rGod は果して Sehu ではないだろうか。rGya rGod の Sehu (Siñu) rgyal po が Mi ñag の王名として示されるのは rGod を含む rGya の部族構成を反映しているものであり、その起源的構成は rGya ron とは成り立つ可能性を欠き、西方 Khams stod の rGya においてのみ考えられる。しかも rGod は確かに東方の rGya に含

まわっていた。<sup>(134)</sup> 例えば、新旧唐書の党項 IDon rgod 伝には細封氏<sup>(135)</sup>があり、附国伝には左封氏<sup>(136)</sup>が挙げられている。また、敦煌文書では Sehu の名は Sum ru 西部の rGod の住地 Po mthon で確認され<sup>(137)</sup>、加えて、rGod を複合した rGya には東遷する明らかな理由があった。<sup>(121)</sup> 筆者は偶然がこれだけ重なることはないと考えている。

以上で Thoñ, Khyab (rKyañ), rGya, Phyyah, IDin を東、東南、南、西南、西と弧を画く関係位置においてそれらと複合する、rGod の存在を確かめたつもりである。

敦煌資料には rGod sar ston sde 阿骨薩なるものが示されているから、<sup>(137)</sup> rGod kyi ston sde (普通名詞 rgod [軍]、g-yuñ [市民] の rgod ではない) もあった筈である。果して rGod kyi sde の形で敦煌資料の間にその名を確認できる。<sup>(138)</sup> しかし、rGod または rGod sar のいずれも Sum ru のうちには含まれず、また、他の部族と複合する関係から推測すれば、Sum ru の北側に大きな拡がりをもっていた大部族と考えられる。

他方、Khyuñ po Pun sad zu tse の歌の意味から考えれば、<sup>(138)</sup> rGod lāin は Sum ru には含まれないが、明らかに rTsai のうちにあつた筈である。だから、rGod も rGod sar も同様に rTsai のうちに含まれていたものと思われる。つまり、これらを含む rTsai Yul は Sum ru の北にはみ出していたと考えられるのである。

とすれば、rTsai は特にその西部に Phyyah が支配者として君臨したわけであろうが、部族としては rGod (=Señu) がずっと東にもかけて一円に勢力を振っていたと見なければならぬ。

敦煌文書には rTsai chen<sup>(139)</sup> という呼称が屢々見られるが、それによつて示されるものは不明である。恐らく rTsai と本来いわれるものを中に含んだ大きい rTsai というのがその名の由来であろう。しかし、Sum ru の名

が現れた後にも編年記では独立に rTsan chen の字が見られるから、Sum ru に含まれた rTsan<sup>(14)</sup> を除外して云っているのかも知れない。いずれにせよ Sum ru をはみ出した rTsan があつたことを主張し易くする記事とせられよう。

文成公主は Tsogi Jon yo du で Guñ sroñ guñ brisan と会つた。Tsog の sde に stod と smad とがあつたことは敦煌資料で知られている。中国資料によれば Tsogi Jon yo du は栢海に当る。<sup>(15)</sup> 栢海は烏海、星宿海に続いてあり、チベット資料の名称と併せて考えると、今日の札幌、鄂陵の二湖に続いて多数の小湖水が集つたところを指していたと思われる。チベットでいう sKar ma than<sup>(16)</sup> が星宿海を含む地であろう。とすれば、この辺が rTsan chen といわれた地域に入つていたと考えることは決して困難でない。Tsog もおそらく rTsan chen に含まれていたであろう。

rTsan yul dbus という一句が Thomas 氏の取り上げた問題の資料に見えているが、Tsogi Jon yo du が既に rTsan yul dbus にあつたのか、或は、欠けた部分に「rTsan yul dbus を通つて Tsa god に至る前に……」とでもあつたのか全く不明であるが、とにかく rTsan yul 乃至 rTsan chen は河源の地を含んでいたか、少くともそれに接していたことは云えるであろう。

今迄見たところからでは河源の栢海辺を rTsan yul dbus とするには困難である。dbusu と読んだ su は必ずしも明瞭ではない上、後に続くところを欠くから、これ以上究明することは出来ない。ただ河源と rTsan yul との間には挟まれる他の地域がないことを確認することで満足すべきであろう。

結論として、*Sehu-Phyvah* の複合と解される蘇毗の領界は *Sum ru* の北にも及んでゐた *rTsan* の境界によつてきめられると見えよう。恐らく、*rTsan chen* は蘇毗から吐蕃の軍に編成された孫波 (*Sum pahi ru*) の領域をとりさつた区域を指すもので、孫波は吐蕃王家と同系の *Phyvah* (毗) の事実上の勢力範囲を限つてつくられた *ru* 翼であらう。同じく *Phyvah* に属する *rKon po*, *Dags po* はその南にあり、*Sum ru* 出身者は敦煌地方では、本土出身者と同格に扱われ *Bod Sum* と呼ばれてゐたことと蘇毗のうちの孫波の性格も知ることが出来る。

## 7 おわりに

以上、公主到着の地に始めて、*Yan lag gsum pahi ru* 即ち *Sum ru* の境界を調べ、*Sum ru* と *rTsan yul* の関係を辿り、*Myan pho/Nan po*, *glin/glum/klum*, *klum/lon* の所在と、既に Stein 氏の指摘する *hPhan yul* にも触れて、大まかな *Sum ru* 周辺の部族関係の問題もことごとち違つた角度からのぞいて見た。Pelliot 氏以来定説となつてゐる蘇毗の異称とされる孫波は、*Sum pa* であるとは違ひないが、*Yan lag gsum pahi ru* を指していることも併せて触れ、識者の批判を待つことにした。

いわゆる *Sum pa* 族については稿を改めて論じたいと思つたので筆を避けた。蘇毗と女国の問題も同様な理由で触れなかつた。

(東洋文庫研究員)

## 路 邊 文 獻

- A.D.C. B. Karlgren; *Analytic dictionary of Chinese and Sino-Japanese*, Paris, 1923.
- A.F.L. F. W. Thomas: *Ancient Folk-literature from north-eastern Tibet*, in *Abh. d. Deutsch. Ak. de Wiss. zu Berlin*, kl. f. Sprachen.....no 3, Berlin, 1957.
- A.M.C. J. F. Rock: *The Amnye ma-chen range and adjacent regions*, Serie Orientale Roma XII, Roma, 1956
- Chosg. dge bces Chos kyi grags pas brtsam pañi brda  
dag min tshig gsal ba  
格西曲札・藏文辞典・附汉文註解‘北京’一九五七年
- C.L. P. Demiéville: *Le concil de Lhasa*, Paris, 1952.
- C.P. M. Lalou: *Catalogue des principautés du Tibet ancien*, Journal Asiatique CCLIII, 1965.
- Desg. (Desgodins), *Les Missionnaires Catholiques du Thibet: Dictionnaire Thibétain-Latin-Français*, Hongkong, 1899.
- D.T.H. J. Bacot, F. W. Thomas, CH. Tousseaint: Documents de T'ouen-houang relatifs à
- Dz.G. l'histoire du Tibet, Paris, 1940.  
bla ma bTsan po sMin grol no mon han: hDzam gliñ chen poñi regyas bçad. 146 f. cf. G. T.
- F.H. G. Uray: *The four horns of Tibet according to the royal annals*, Acta Orientalia Hung. X, 1960, pp.31-57.
- F.P.G. M. Lalou: *Fiefs, Poisons et Guérisseurs*, Journal Asiatique CCXLVI-2, Paris, 1959.
- G.G. Grags pa rgyal mtshan gyi bkah. hbum. vol. Ta.  
Thu bkvan sprul sku blo bzah chos kyi ñi ma: Grub mthañ çel gyi me loñ, éd. sDe dge, 164 fol. 1802.
- G.Ç. bSod namg rgyal mtshan: rGyal rabs rnams kyi byuñ tshul gsal bañi me loñ, 104 fol. 1368?
- G.T. T. Wylie: *The geography of Tibet according to the 'Dzam gling rgyas bshas*, texts. tr. & notes, Roma, 1962.
- H.B. dPaño gtsug lag hphren ba: lHo brag chos

- hbyun (=mkhas pañi dgañ ston.) 1545-1565.  
vol. Ja, Ma.
- H.L. hTshal pa Kun dgañ rdo rje: Hu lan deb ther,  
1346. (Deb ther dmar po, 40 fol. Sikkim,  
1961)
- K.G. A. Ferrari: Mk'yen brtse's guide to the holy  
places of central Tibet, completed and edited  
by L. Petech with the collaboration of H.  
Richardson, Roma, 1958.
- K.Ts. mkhyen rtseñi dbaṅ po: Dad pañi sa bon, 29  
fol. éd. sDe dge, 十本却却經卷之廿
- M.S. R. A. Stein: Mi-ñag et Si-hia, géographie  
historique et légendes ancestrales, in BEFEO,  
XIV, 1, Hanöi, 1951.
- N.I.R. H. Richardson: A ninth century inscription  
from Rkoñ po, JRAS, 1954.
- N.T. P. Pelliot: Note sur les T'ou-yu-houan et les  
Sou-pi, T'oung Pao XX, 1921.
- N.T.R. L. Petech: Nugae tibeticae, Rivista degli Studi  
Orientali vol. XXXI, Roma, 1956.
- O.T. G. Uray: Old tibetan dra ma drañs, Acta.  
Orient. Hung. XIV, Budapest, 1962.
- P. collection de P. Pelliot.
- P.A. G. Roerich: le parler de l'A mdo, Roma, 1958.
- P.S. Sum pa mkhan po: dPaḡ bsam ljon bzai, 317  
fol. 1748.
- R.E.B. R. A. Stein: Recherches sur l'épopée et le  
barde au Tibet, Paris, 1959.
- R.F. M. Lalou: Revendications des fonctionnaires  
du grand Tibet au VIII<sup>e</sup> siècle, J. A. MDC-  
CCCLV, 1955.
- S. collection de A. Stein.
- T.A. R. A. Stein: Les tribus anciennes des marches  
Sino-Tibétiques, légendes, classifications et  
histoire, Paris, 1958.
- T.L.T.D. F. W. Thomas: Tibetan literary texts and  
documents concerning Chinese Turkestan.  
London, Pt. II. 1951.
- T.T.K. G. Tucci: The tombs of Tibetan kings, Roma,  
1950.
- Ts.L. Sum pa mkhan po, mTsho shon gyi lo rgyus,  
1786. (Śatapiṭaka vol. 12-2. New Delhi, 1960)
- V.S. Sañs rgyas rgya msho: Vaidūrya ser po éd.  
Śatapiṭaka. India, 1960.

衛通 衛藏通志、卷十五

回展 回顧と展望、史学雜誌、七四編五号、七五編五号、一九六四年、一九六五年

玉調 玉樹土司調査記、民国八年

考異 山口瑞鳳、古代チベット史考異、東洋学報、四九卷、三号(上)、四号(下)、昭和四一年十二月、四二年三月

古チ研 佐藤長、古代チベット史研究、上、下二卷、京都、昭和三三年、三四年

中図 中華民國地圖集、第二冊(一九六四年)、第四冊、(一九六二年)台灣

顯実 山口瑞鳳、顧実汗のチベット支配に至る経緯、岩井博士古稀記念典籍論集、東京、昭和三十八年

通典 通典 边防

東蒙 和田清、東亞史研究(蒙古篇) 東京、昭和三十四年

唐会 唐会要 卷九九

吐夏 佐藤長、吐蕃王の夏牙悶懼慮川について、古代文化、十五—二、昭和四四年

吐敦 藤枝晃、吐蕃支配期の敦煌、東方学報第三二冊、京都、昭和三六年

吐蕃 山口瑞鳳、吐蕃—伝承と制度から見た性格、歴史教育十五卷九、十号、昭和四二年

敦遺 羽田亨・ポール・ペリオ共編、燉煌遺書第一集、

釈迦牟尼如来像法滅尽之記解説

西新 西寧府新志 卷十九

註

(1) 「考異」(上) 一一九頁、 「考異」(下) 四〇—九六頁

(2) T.L.T.D.II. p.4. Thomas 氏は同書 p.13 で同名異人と判断している。 D.T.H. p.17.

(3) dBahs sTag sgra khoṅ—o' lod は読みとれない。この人物については「古チ研」四五一、四五六、五〇四—五頁参照。

(4) D.T.H. p.24.

(5) 金城公主を迎えに赴いたのは Shan bTsan to re lhas byin (D.T.H. p.20) と御史名悉臘 Myes slebs である。 「考異」(下)註187「古チ研」四八六—四八七頁註13参照。

btsan to re は古代チベット土侯の称号的名称であつて、いわゆる名前ではない。敦煌文書では同種のものに smon to re, rgyal to re, pans to re, shan to re, mñen to re, bcos to re, nam to re, bzau to re, lhrin tho re, khri do re, sñā do re, se do re などがあり、——thog rje の異態と考えられ、 khri thog rje, lhrin tog rje, khri dog rje の形も同時に見られ。

shan/shan po にひいては「考異」(上)三—二二頁参照。

- (9) Petech 氏が取りあげた (N.T.R. p.292) 後代の人名は次の八名である。括弧内は比較された Thomas 氏のものに見えるものを筆者の読み方で示した。

hBro Chuñ bzaiñ hor mañ (Cog ro Cuñ bzaiñ hdam koñ)

Khri bans (Khri bans)

shan bTsan to re lhas byin (shan bTsan to re)

shan Khri bzaiñ (hBro shan Khri bzaiñ kha ce stoñ)

shan rGya sto (hBro shan bsTan sgra ya sto)

dBahs Khri gzigs shañ ñen (dBahs Khri bzaiñ spo skyes)

Cog ro gNaiñ koñ (Cog ro sToñ re koñ zun)

dBahs sTag sgra khon lod (dBahs sTag sgra khon

—0—)

- (7) 「考異」(ト)四〇—五〇頁、其の間の諸註。

- (8) Petech 氏は敦煌文書が写本であるから誤写もあつてしかるべきであるとするが、至極正當な考え方である。

(N.T.R. p.292)

- (6) D.T.H. p.20.

- (10) 註5参照。

- (11) 「考異」(ト)註100参照。チベットの古曆は中国の曆より春夏秋冬を一月遅れにとる。これは既に述べた通りであ

蘇毗の領界 山口

る。その後、判明したことは年頭を季春 dpyid zla tha chuñ にとつてゐること、敦煌編年記の年末に春の記事がより多く出たことと符号する。季春は曆の上の春分を含む月にあることを原則とするが、吐蕃ではむしろ、そのような月を年末として一ヶ月遅れに正月を取つたのである。春夏秋冬を遅れさせるかどうかは後代でも跡をひいて論争されている。また、置閏法にも二種があつてこれも後代では byed rtsis, grub rtsis の二派に承けつがれて論議された。朔は中国の曆より一日乃至二日遅れることがあるので敦煌漢文書などでは朔の干支番号によつて年次の干支を判定出来る例が多い。二種の閏は相互に二ヶ月或は三ヶ月の差があり、共に三十二、五ヶ月に一度置かれてゐる。詳細は後日論じた。

- (12) 今日の lHa sa であつたに異説はなう。H.B. Ja, f. 109a 21 Ra sañ hPhrul snah gi gsung lag khañ 21 句を含む Khri ston lde brsan 王の敕書の写しがあつてこれを証言してゐる。(T.T.K. pp.44, p.97, C.L. p.154, n.5, pp.200-203, n.1) Ra sa 21 Rva 氏と關係があるのではなうだらうか。Rva sgreñ, Se ra など併せて考えるべきで「山羊」の地は俗説であらう。

- (13) Bal po が Nepal かどうかについては異説も多い。「古チ研」七四—一七四(五頁参照)これについて Deméville

氏は詳細な註を与えている。(C. L. pp.200-203 参照。)筆者は Bal po = 跋布とし、拔布海を今日のどこに比定するとも知らないが、Bal po はこの場合ネパールではなうとだけ考えている。なお、Demieville氏が言及する悶懼慮にについては佐藤氏が Mal tro を訳しているが(「吐夏」四一—四四頁)正しくは思へ。Bal po, Brag dmar は btsan po の幼時の往復に支障のない近距離にあることを必要としている点強調しておきたい。

(14) D.T.H. p.20.

(15) 河源、rTsan yul, Tsogi Jon yo du にいっている本文中特に第六章参照(「考異」(上)註<sup>93</sup>101参照)なお、rGya mo Tsha ba roñ = Tsha ba roñ ㄴ rGyal mo roñ, ㄴ 屢々混同される。rGyal mo roñ ㄴ Tsha ba roñ ㄴ りんづは Dz.G. f.756 ㄴ “Tsha ba roñ/Sa nan roñ/Nag roñ/rGyal mo roñ te roñ chen po bshi” ㄴ りんづ四大 roñ に分けた中に夫々が別に見られる。Tsha ba roñ の位置はそのすぐあとで「sPo bo の東に行けども」を示されている。へむしへむ G.T. pp.178-179, n.584 参照。ここは文成公主が滞在したため rGya mo tsha ba roñ ㄴ 呼ばれ、ㄴ りんづの rGya 部族々々から rGya roñ/rGyal roñ/rGyal mo roñ (mGar thar の東、Dz.G. f.77 a. G. T. p.184, n.635) ㄴ 混同されるに附くであろう。

Vairocana が赴いたのは rGya/rGyal mo tsha ba roñ ㄴ ㄴ りんづ rGya roñ ㄴ ㄴ りんづ (T.A. p.27, n.63)°

(16) D.T.H. pp.20-21.

(17) rGyal gtsug ru は個有名詞で、Bacot 氏の訳 (D.T. H. p.40) のように皇太子を意味すると思われる。「考異」(下)註<sup>101</sup>参照。

(18) D.T.H. p.19.

(19) 「考異」(下)註<sup>101</sup>

(20) 「古チ研」四〇八—四〇九頁

(21) 例えは、敦煌編年記で調べて

Mañ slon nan tsañ 650-658, Mer ke-ṅ Nēn kar.

Khri hḍus sroñ 676-689, Nēn kar. 690, Bal po. 六九五

年まで遠くへ赴いた様子はなう。なお Bal po は跋布で中央チベットにあると思われる。(註<sup>91</sup>参照) Khri lde gtsug rtsan は七二一年迄 Bal po、Brag dmar ㄴ 其の後 Mel tro, Brag dmar, Nēn kar 等とつづいて七二四年まで遠征に出づなう。三人とも、数え年は十七、二十一、二十一歳頃迄遠征の記録がない。Nēn kar にいっている註<sup>102</sup>参照

(22) 「考異」(下)四六頁

(23) 註<sup>9</sup>参照。人名の完全な一致は Khri bañs のみである。dBahs sTag sgra khoñ lod は最後の字に保証がなく。shan bTsan to re, shan Khri bzāñ などあれば、最

もありふれた名で後半が示されない限り、比較出来ない。

なお、shan は舅であつて個有名词ではない。(「考異」(上) 三一二頁参照)。

(24) 翼 ru の制度に関しては、筆者も概説したことがある。(「吐蕃」四一—四八頁) ほかにも、G. Uray 氏による翼制成立の考証がある。(F.H. pp.31-57) 然し、同氏は Ru lag と gTsan ru lag との二上と gTsan と rTsan と、更に rTsan chen と同一視する。また、ru gsum と Sum ru とは区別した方が、Yan lag gsum pahi ru (= Sum ru) と mDo smad の Sum pa と同じ、<sup>26</sup> 恐らく Sum yul の Sum pa (hBal, rLants, Kam の国) のつゆのつゆが、これと同じである。(p.53) Sum ru とつゆのつゆのつゆとは本文にゆきがあるが、同氏の述べる不都合な点を次にもとめておこう。

Ru lag は ru gsum には入らぬが、ru bshi の一つは gTsan の南部である。しかし、gTsan は rTsan と同じである。Uray 氏は rTsan に含まれる Myan を gTsan の Myan と思ふこと、簡単に結論をひき出しているが、後代では Myan/Nan が異なった土地に別々にあつたことを不用意に見逃したための誤りである。(T.H. p.53, n.47, n.48) (本文第四章参照)

Yan lag gsum pahi ru/Sum ru がつゆのつゆ Sum pa

蘇毗の領界 山口

族を基体としてゐるものと見たのも、Pellicot 氏 (N.T. p. 33) 以来の定説に従つたための誤りであつて、Sum ru と Sum pa 族との如何なる関係もこれまでに実証されてはいない。蘇毗が吐蕃に属して孫波——確かに Sum pa であるが、この Sum ru, Yan lag gsum pahi ru に含まれる gSum pa の対音である——と改称したことを hBal-rLan (吐蘭) の Sum yul<sup>27</sup> Myan Shan suan が征服した Sum pa 族と何のかかわりがあつたやうな。Sum ru と Sum yul の間には多弥がいて両者はその両側にあつたはずである。(吐蘭は多弥の東、蘇毗は多弥の西) T.A. p.42, n.2 「古チ研」一二五頁) Ru lag とは g-Yas ru なる ma に対して (lag/hag) 即ち、第一のものを意味する。つまり、ruih yan lag gTis pa は yan lag gsum pa はそれとまたつゞち異なるたる gsum pa と称せられたまひである。それゆゑ、蘇毗と孫波とは音韻的関聯を求めるべき対象関係には全くなかつたのである。偶然の類似に多くの学者が振りまわれたところへきびである。(「古チ研」一二九—一四〇頁。T.A. pp.41-42, n.111) 勿論、蘇毗=So byi=Supiya (「嫩道」田田解説 T.L.T.D.I. p.42, p.156) を否定するのびである。

(25) 我々の問題としてゐる rTsan の名が gTsan と同じ示されるので dPaho gtsug lag hphreñ ba の H.B. Ja



gur phub, dbus tshad lha sa ra mo che la byas pa  
dbu ru/ H.B. Ja. f.19a.

- (37) Prags/Phrags は敦煌編年紀 (D.T.H.) に sPrags kyi  
mur gas, sPrags gyi ga ra na など見えて sPrags を含  
う。後者は Man slon man rtsan が六五九・六六八・六  
七六年に宮居を置いた地である。

- (38) Sum ru が g-Yas ru の北部に僅かに接しつつたの  
でなく(註26参照)かなりその領域の裾野を拡げつつた  
りとも意味するのでもあらうか。

- (39) 註26参照。Shan shuñ smad は H.B. Ja. f. 20a. に  
これは、むしろ、古典時代(例えば Dz.G. の *shuñ* の)  
の Shan shuñ の版図そのものの Shan shuñ stod は La  
dags よりずっと西北に伸びつつたと考えられる。西域記  
巻四に見られる東女国は Shan shuñ stod の範圍を示し  
つつある。そして、西の三波記は時輪經大註 hJig  
rten khams le, ff. 28b, 37a に *shuñ chu bo* *Çiañi byañ*  
*Tsam pa kahi yul* に他ならぬ。とすれば、西域記屈露  
多国の条にある秣羅娑国は秣羅婆などに改めるべきでなく  
Bru sha であらうとしようとなる。十三七七年にはチン  
グはこの国を攻撃し、七四〇年には Bru sha 王に公主  
を与えていることも参考になるであらう。(D.T.H. pp.  
25-26) (「古事研」一三三―一三八頁) など Dz.G. f.61a

に *Tsam ba sogs dan ñe sar mñan ris La dvags kyi*  
*rgyal khams yod*……などあり。

- (40) Lalou 女史の既言及ぶ (F.P.G. pp.4-5 [pp.160-  
161])、Uray 氏が利用しつつた。(註24参照)

- (41) H.B. Ja f.19b.

- (42) 理由は本文引用のものを統一節、

*kluñs god Nam po hDru dan Phyugs mshams yul*  
*kluñs god Nam po ñe hDru ñ Phyugs mshams* の図  
に示しつつ説明がある。

*kluñs god Nam po* は敦煌文書に *kluum ro ya gsum*  
などといふ Nam pañi bu gsen ti が領したと記されて  
を含む地である。(P.1286, P.1290) *kluñs god* は  
*kluum ro ya gsum* より Nam po が別と註記する(註28)  
*kluum/gluum* は和訳するのなと誤られる。 *kluum ya gsum*  
は *shuñ* の *Zin po rje sTag skya bo* の領有しつつた  
の *shuñ* は *sTag skya bo* の *miñan* が叛つて *Zin po*  
*rje Khri pañs sum (=dGu gri zin po rje)* の *shuñ* と  
した。その後 *Khri slon brtsan* の時代になつて *dBabs*  
と *Myan* とが *Khri slon brtsan* と結び、*Khri pañs sum*  
を滅すが、おそらくその後吐蕃王の配下で *Nam pañi bu*  
*gsen ti* の *shuñ* となつたのであらう。とういうのは、*shuñ*  
*Nam pa* の所領は *shuñ* とはせず P.1286 に *shuñ sTag*

skya bo の大臣であつた mNan が既に dGu gri zhi po の大臣として示されているからである。(つまり、記録は sTag skya bo 滅亡後のものとなる。)しかも、先程の引用文でも kluus god に接する地が Nam po とあつて Nam pa 所領の痕跡と見られ、それが後代の資料に属するから、今見た前後関係は崩れないと思われる。

引用文に見える Phyugs mishams 氏は元来 dBu ru の一〇〇 ston sde (H.B. Ja f.19b) の過半数であつた。Khri ston lde brtsan 代に於いて同じく dBu ru の ston sde であつた Dor te と共に大功をたて、以来おおいにその名が顯れた (D.T.H. p.115)。敦煌支配期にも大活躍をするが、Khri ston lde brtsan 以前の編年記にはその名をえ見からなう。これに反し、有名な mGar ち Khri hdus ston 代まで (638, D.T.H. p.18) 勢威をほしつゝまたしたのにもかかわらず表中には全くその名が見えない。はつきり Khri ston lde brtsan 代のものを誤つて示していると言えよう。

- (43) D.T.H. pp.101, 106-108, 111-112, T.L.T.D.II. p.53.

(44) sTon 氏は次註で見られるように吐蕃王家の sPu/sPus 氏の系統であつて、第六章でみる sTon/Thon/mThon とは一応関係はないと見られる。

- (45) Dar pa/hDar ba/Dar ma は屢々 Nar pa と誤読せられ (D.T.H. p.80, pp.98-99)。Shan shun Dar mahi rje bo (P.1290), Dar pahi rjo bo (P.1286) Lig sha gur と同じ示され Lig 氏の所領である。しかし Shan shun の rgod kyi ston sde とは含まれていない。(H.B. Ja. f.20a) Dar pa は今日も名を残してゐる (次註参照)。吐蕃王家の創興神話にも現れる。(D.T.H. pp.97-100) Dri gum btsan po ち Lo nam rta rdzi に殺された後 sNa namz 氏 ち bShon 氏 ち Lo nam rta rdzi を殺して仇をうぐ。それがもつて Lo nam の妻となつた Rhya 氏と吐蕃王家に連なる bkRags 氏 (lHa bu ru la skyes/ lHa bu rus la(s) skyes 「神子父系に生れたるもの」) とは戦い、後者が敗れる。bkRags 氏の妻の一人が亡夫の國に逃れて二子を生む。名をなす sPus kyi bu Dar la skyes (sPu/sPu de gum rgyal の sPu) の子 Dar ち生れたる者」という。父の國は Dar ちのこゝとなつてゐる者が成長して rKön yul と逃れつゝ Dri gum btsan po の遺子 Ça khyi, Na khyi (Ça na ち「仇を討つ」の意) と協力して國を再興し Ça khyi は名を改るゝ sPu de gum rgyal と称し、彼は大臣になつたとする。

また「宰相記」ともいうべき文書 (D.T.H. p.100) と最初の宰相とつて hDair kyi bu sTon dan rje ちの各



yul zun に企みをなされ、あやうく家系断絶になるところを自ら生命を絶ち、息子の運動で事なきを得たという。

(D.T.H. pp.111-112)

(15) D. T. H. pp.106-108.

(25) rTsan Bod の Bod に関して筆者は隋書や北史の附國を訳したのと考えている。附國も二万户であったことその他は Bod が古層の文献で、Kham の一部 Mar khams を指したと考える方が色々の点で妥当性をもつてゐるからである。Bod chen po が Kham 一田を指し、Kham が Bod dran po (チベット Bod) と呼ばれることを、文成公主が Tsha god に住んだのに対して敦煌編年記は Bod yul とを迎えた (D.T.H. p.13) と記しているところからである。詳しくは別稿で論じたい。

(25) D.T.H. p.100.

(25) rMañ po (P.1286, 1060, 1285, A.F.L.), rMoñ (P.1290)

(25) D.T.H. p.106.

(25) Dags po lha sde ṣ rKon po, Myan po (=Phyvañ) と共に Nag fi (D.T.H. p.111) と同じ示される。Nag fi とは Nag cig gi ñe 「同一ののならわれた親族」の意である。

IHa bu ṣ Ru la skyes (Rus la skyes)(註49参照) と

冠せられ、IHa bo ṣ Khu 氏に附せられて (H.B. Ja. f.8b, D.T.H. p.100) にとでも注意しよう。

(25) Khyun po Pun sad zu tse が blon che としたの ṣ mGar ston bsan yul zun の直前 (D.T.H. p.101) である。mGar は blon che としたのには Khri ston bsan の晩年 (640 年) は blon chen とあつて blon che とはなす。D.T.H. p.13) と見られる。従つて Khri ston brtsan 代に既に大功のあつた老重臣 (D.T.H. p.111) としつは確かに blon che に任ぜられるのも遲すぎた筈である。この場合などは Khri ston brtsan 代であるが、當時から何か警戒される点があつたのに違ひなう。

(25) D.T.H. p.107.

(25) Guñ bkros, Bacot 氏は “fauve mort” と訳す。(D. T.H. p.140)

(25) 原文は sla ṣ ṣ gla の誤字、或は誤説でなにかと思われ。gla lvo ṣ kla klo と綴られ、仏典翻譯時代以来 mlecha の訳語に當つられ、結局、ベルシヤ人、回教徒をつうのに用いられるに及んで、もとのものを指すのは la lo/lo lo が代つたらしい。元来は雲南北部、Kham 南部に古へからいた種族の称である。kla klo を glo pa から派生した形に見る考え方が一般的であるが、極めて疑わしい。glo pa ṣ ṣ lo pa/lo pa ṣ ṣ

べ' D<sub>2</sub>G. べ' glo pa n Lo lo 地区について語つて Lo lo についてのは次のやうに云ふ。"Mi lihi lho nub dan rGyal than gi lhor Lo lo zer ba Ga rohi rigs su glogs pa sde chen……"「Mi li の南西に rGyal than の南に Lo lo と称して Ga ro 族に属する大集団 (かきろ) (D<sub>2</sub>G. f.75b)

筆者は附国伝に見える嘉良夷をこの Ga ro の Lo lo と考へ、問題の gla lvo について見る。Bacot 氏の訳は勿論取るな。

(19) lHo の rNégs の吐蕃創興期の功臣の部族に、lHe/lHo rNégs と一連に読入してはならぬ。(D.T.H. pp.140. 142. 156) Bacot 氏の訳文は全面的に改められねばならぬ。lHo は今日の Lo ro から Lo/gLo pa のうるところ (D<sub>2</sub>G. ff.73b. 74a, 75b. G.T. p.178, n.583 参照) に拠つてゐたと思われる。rNégs については本論第五章参照。lHo については註14参照。

(29) bran は mehis bran, pho bran の用法によると「住う」を指すとは論じたことがある。(「回展」一九六五年一五六頁)

なお、敦煌文書には

Hol rjehi zin bran tsha (P.1286), Zin bran tsha, Zin pran (A.F.L.)

蘇毗の領界 山口

rNégs rjehi La bran (P.1286), (P.1290), Lin bran (P.1060)

glin hbran tsehu (A.F.L.), glin brag tsehu (P. 1039)

glum bran tsehu (A.F.L.)

rMu yul gTan brag chahi nur nur (P.1285)

などという用ゐ方が見られ、整理すると

brag/hbran/bran/pran

tsha/tsehu/tsehu/chahi

にまとめられ、brag tsehu, hbran tsehu 等の前にくるのは個有名詞である。普通名詞を構成する後の要素は tsehu/tse/tse から che 「大」、rise 「頂」、rje 「主」など一連の意味を辿らせる。tsha はその不完全な異態と見たう。とうのは cha, tsha, rtsa には「分りませう」「系統」「筋」などのほつきりした別の意味をもつ連関が認められるためである。

brag は drag po に変つて「貴族」を意味し、同義は dra ma によつて示される (Desg. p.493b)。しかも貴族の起源を成す意味で「精兵」(O.T. pp.219-224)を表す。bran は古くは rans として「住う」の意にも用いられる (F.P. G. p.14, P.1285) が、単なる「住居」の意味よりも「住居群」或は「それらを支配するもの」「住居」「やかた」の

意と考えられ、それから「酋首」の意味にもなったのであろう。更に、その上から彼等を統率するのが、*h'bran tshetshu/bran tshetshu/bran tje*「おやかた」、「大酋首」だったと考えられる。*gron* が「固」を意味すること、*gran* が「数」を表すのも参考になると思う。*Zin po tje, Man po tje* の *po* は *bran* が「住むもの達」の意味に用いられて置き換えられたのであろう。

- (63) *Ya stod* は *r'tsan, Sum ru* の範囲がわかれば自ら明らかになるように *r'tsan* 一円を指し、中国文献でいう大羊同はむしろ *r'tsan chen* は「東北部に在る」。小羊同は *Shan shun* は *ya/yan/yar* は *Ma/man/mar* に依り、*stod* は *smad* に対し、いずれも大河の上流域を指すのに用いられる。一般に後代では *stsan po* 江の上流域が *stod* と称せられて有名であるが、*Khams* 地方で昔、金沙江(楊子江)上流 *Mekong (Dza chu, Nom chu), Salwen, (Nag chu, d'niul chu)* 更に黄河の上流も含む *Ya stod* と称したことはたやすく理解出来ると思う。*Khri ston brtsan* 代まで吐蕃王朝の第一の課題は *Khams* 地方の掌握であり、*Khyun po Pun sad zu tse* が活躍した主な舞台もなおこの大羊同と *Khams* をあつたことを併せて考えるべきであろう。注72参照

(64) *than* は身体部分の名を当けるとすれば、「胸」の意と

思われる。註62で見た *dran tje* からなお *dan tje/than tje/than tje* がひき出され、*drag po*「貴人」からは *bdag po*「主人」を追うことが出来るように、*dan po*「第一」*than*「權威」を迎えることが出来る。この場合、*dran/than* は *bran* の本来の意味「やかた」「酋首」に続いてゐる。*than* が「高原」を指すのも *bran* の在所から派生した意味であろう。*dran* の *r* が脱落すること、*dan du len*「承知する」が *dran por*「素直に」うけることを意味する用例で了解できる。これから「胸」「*bran khog/than khog*」が「中枢—心臓」を内容とする体腔」の意で用いられてその意味をもつ。*khog* を *bran* によつて限定したのが元来であつたと考えられる。従つて、*bran* そのものは「胸」ではなかつた。しかし、今日では *bran* に「胸」の意が与えられているから *than* についても同じと考へてよいであろう。「尾」の訳も与えられるが、「尾」については知らない。(T.A. pp.39-40, M.S. p.265, n.4)。「雄」と訳したのはこれらの事を考えての上であるが、歌の意味は一重にかけられており、表の意味は「*r'tsan* に巣くうは羊同の白き胸の天翔ける鷲」である。*prom* については次註参照。

(65) *prom* が「白くぬく」であることに関しては Stein 氏の周到な考証がある (T.A. pp.37-39)。筆者は *prom* を

phrum の異態と考えている。phrum は今日でも「酪」の意を留めており、phrum khu, phrum slad が夫々バターをとったあとの汁とチーズをとった残りの汁を意味する。最初にとるバターはものによつて時には黄色味を帯びるが、そのあとでとる phrum は真白である。phrum は遊牧民には頗る馴染みの深い大切な乳製品で、乳の「粹」である。「白」を示すと同時に「本質のあつまり」であることを彼等にも思わせたに違いない。「phrum gсар stobs bskyed khu ba hphel」：「新しい酪は力を生じ、精を増す。」(Chosg. 中国版増補 p.542)と考えている。

phrum の語源は bsrnubs 「集める」 rub 「鍛造する」「こ合す」 drub 「縫う」などに近いと思われる。(bs/rn) にいつては「考異」(下) 註55(参照) prom/phrom/brom は phrum の異態で、khrom は「集り」から「市場」の意味が派生したものと云えよう。従つて本文中の than と prom とを結びつけば裏の意味は「雄の粹が集つたもの」を表つてゐると見られる。

- (66) rGod lāin ba は「天翔ける鷲」の意であるが、敦煌資料には「六翼」以外の sde の一つに rGod lāin gi sde (T.L.T.D.II. pp.128, 129, 466) が挙げられた。Byan po rGod lāin gi sde と北方にふたことを示してゐる。rGod は rGod, rGod sar, rGod rtsān, rGya rGod とつて、キ

た、「党項」(＝唐古特)を Thon rGod または lDon rGod と解けば、本文でられる「姜葛」 Khyab rGod (rKyan rGod) の例も加えて複合部族名の要素をなしてゐることが考えられる。他方、rGod は gyun に対するものとして「武」「暴力」を意味する。(“rGod kyis ni ma bsgroñs na” “武力によつて殺さなければ” D.T.H. p.108)。ちよび複合語の後半を構成する例が多いので、前半の要素のみを名称的に解し、その武暴の徒と解釈するかも知れない。しかし、本論第六章に見るように rGod には部族名称的なところが明瞭に辿られるので、Sepu 蘇族がその果敢な行動の故に獲得した異称とも考えられる。本文 74—76 頁参照。

lDin は Sum ru の西端 Yel shabs sdins po che (本文二八頁)の sdins を lDin の異態と考へ、lDin の本拠を lDin po che/lDin bran tshe (註62 参照) と称した名残りといふことが出来るので、複合部族名の要素とやはり認定出来る。rGod の西に位したのであらう。

- (67) gsab gsab は sab sob/gsab gsob 「(け)足」から「いつはり」の意になるが、あつてもなくてもよいような本体に附属したもの」の意「いぢや・いぢや」から「多忙」 tsab tsab, tsab tsab, tshab tshab の意で派生する。

- (68) 歌のきまり詞「夫々「昔はいつても」「これからもいつても」といつて継続する状態について云つたりする場合の枕

となる。

- (69) *hphan gyi snon, hphan gyis brab* の *hphan* を *Nas po* と改称された *hPhan yul* の意味に解する見方が多い。  
(T.A. p.25) 又それは *hPhan yul* を *IHo, rNégs, IDoh, Thoñ, Se, Khyuñ* と分調されたこととなる。<sup>90</sup> (D. T. H. pp.107-108, 116) 然し *gyi snon, gyis brab* などの意味は与えどなく。 *snon* は算数 (*risis*) の用語で、*「加える」* *brab* は「割る」 *thob byed* は「割る」とあり。  
「立く数」即ち「割り消したれた結果は *thob nor, thob cha* となる。若し *hPhan yul* に配置された意なら、*hPhan la brab* となる *hPhan gyis brab* とはなりやなく。従って *hphan* は *phan* (利する) の意味となる。ねばならぬ。なぜ *thob, brob* に関しては「考異」(下) 註54、55、72参照。次でこの場合、第二の“*Se, Khyuñ* ……”は *Khyuñ* の手柄で *Se Khyuñ* が領土を領有していたところのひび、文法上はともかく、*Se* の報酬は云々をわづらうことに注意しよう。
- (70) *dbu phyir ni hgro ba la* の意に取った。 *gro* は *hgro, hgroñ, hgrots, hgrogs, hgron po* 及び *bro, bros, hbrots* と比較できると思ふ。 *Bacot* 氏の訳文では意味が通じない。

- (71) D.T.H. pp.107-108、この *Se Bacot* 氏の訳文に従

はなかつた。この歌は *Khyuñ po* が *Khri slon brtsan* 代末期までの自分の手柄を自讃したものであることに注意しよう。

- (72) T.L.T.D.II. p.53 のBはAの先づけるものであり。  
*To yo chas lahi rjo bo Bor yon tse* を覆滅したのは *Myan Shan snah* を退けた後のことである。 *Khri sron brtsan* 代の前半であることがうかがえる。*To yo chas la* は *Byan gi Shan shuñ* と書かれるが *Shan shuñ (smad)* の北とあり、*Sum ru* の一部或は *rTsañ stod* と重なり、羊同と前をと思われぬ。なぜ *chas la* は分家の王の意であるが *Phyvañ* であることと示す。
- (73) D.T.H. pp.111-112.
- (74) *colophon* であるが、一八二〇年にかかれたとある。  
(G.T. pp.XIII-XVI 参照)
- (75) G.T. p.180, n.599. 参照
- (76) *Pien pa* は *dPal hbar* の発音に極く近い。位置も位里と同じ緯度上にある。東経95°上に見える。但し、碩板多の南二百九十里にある達隆宗の賓巴も辺壩と示される。  
(「衛通」15 参照)
- (77) *Dziro tang* は *rGyal ston* の対音として大きい難点がある。北緯 31°40′ 東経 94°45′ 辺にある。
- (78) G.T. p.180, n.602, 603.

- (79) 古典時代では Bon 教と云うが、<sup>1)</sup> Shan shun と結わけられた。例えは<sup>2)</sup> G.Ç. f.164b. の Bon 教の章の冒頭に Shan shun gyi yul gyi Hoi mo lun rin と現れた ggen rab mi bo のような述句がある。また<sup>3)</sup> Bon の外は Shan shun 以外の土地<sup>4)</sup> 種族と結わけることを<sup>5)</sup> Se bon, rMa bon, lCog la bon, Tshe mi bon (H.B. Ja. f.6b) などが見られる。Bon と gGen rab との関係は敦煌文書に示されている<sup>6)</sup> (F.P.G. pp. 8-25 [164-181])
- (80) Dz.G. f.64b, 65a, 66a, 71a の Myan の stod smad と gTsan po 或は Kailāsa と關つて記述があるのは興味深い。
- (81) Dz.G. f.74b.
- (82) Dz.G. f.71a. G.T. p.163. n.454, 455, 456 参照。
- (83) Dz.G. f.71b. “Phu, mdahi lum mdah dBus stod kyi char...hBri guñ mThil du grags pa dñh...yod!” hBri guñ mThil と云うのは<sup>7)</sup> G.T. p.165, n.469 参照。
- (84) dBus stod に関しては、註83と引用文以外に記述はないが、dBu ru stod を思われ<sup>8)</sup> stod の意味が Kailāsa に近う、<sup>9)</sup> gTsan po 江の上流域に限って用いられたわけではなく、sKyid chu の上流域にも適用されたのを見ることが出来る。註63参照。
- (85) Dz.G. ff.72b-73a, G.T. p.171. n.520. K.Ts. f.9a.
- (86) Nan と云うは K.Ts. f.9a と
- “Dvags pohi sa cha zad mshams Nan Loñ Kon gsum/de nas sPo bo bcas rim par yod cin.....” 「Dags po の地域は<sup>10)</sup> なる Nan, Loñ, Koñ の三つを、次に dPo bo を含め順である<sup>11)</sup>。と示している。本文中の引用と併せて考えると大体の位置がわかる。なほ、Pelech 氏の意見は多少違う。(K.G. p.122, n.208 参照)
- Loñ と云うは註102 122 参照。
- (87) P.1286 と D.T.H. p.80 (巴番 242) と<sup>12)</sup> P.1285 と F.P.G. pp.164-181. と<sup>13)</sup> 其他は C.P. pp.192-204 と収載されているようにした。
- (88) rTsan の Phyvah と吐蕃王朝との関係が最も大きな問題である。
- (89) 雜染拉松多、阿雜拉松多、子野墨松多、穆桑巴吉松多、保吾野永松多、越吉松多(以上玉樹周辺)察復爾松多、恰柏松多、沙里松多(東經85°線上に北から南に)山青松多(桑欽蘇木多、拉里の北)、且篤克松多(hBri guñ の東)等
- (90) Nag, Nags は発音上 rjes hñg の -g 子音をはいて残り人々とそうでない人々とかいえる。Nag god は中国資料で納克書(「西新」19)、<sup>14)</sup> 納哈暑(「衛通」15) 那克雪(「中図」)と書かれてゐるを反映している。ただ、「衛通」



また、*hPhan yul glān than* の *glān than* を *glon/*  
*glum* と結ぶける場合、これは *hPhan yul* の *glum* に  
接する、或うは面する *than* (高原) の意味で考えらるべきで  
あろう。*rNégs* の *gLiñ* または *kLum/glum* が、*hPhan*  
*yul* (= *Nas po*) を *kLum ya gsum* と別にあらうことだけ  
は敦煌文書 (P.1286, P.1290, C.P. pp.192-204) によつて  
確認すべきであるから、*hPhan yul* の *glum/kLum* を同一視  
することも出来ない。(註116 p.55 下段参照)

蘇毗の領界山口

klun's god, Nam po は既に見た(註42)ように、klum

第五十卷 四三五

○ dBu ru の rgod sde に編入せられ (H.B. Ja. f.19b) Yel rab sde bshi を併せ dGu gri zin po rje (= Khri pans sum) と併せられた (D.T.H. p.105) といふので dBu との地続をたつた筈である。

以上の諸点から klums god と連なれ Nam po が、  
hPhan yul と klum ya gsum とに挟まれた glin の  
klum/glum とは重要なものではないかと想定せざるを得ない。  
西チベット Khyun po が領した rTsan smad があつた南は Rva 氏の領する地が続いてつたものとせざるを得ない。

(13) 北緯 32°55' 東経 96°45' 「衛通」15では17の隆布族は受地方蒙古爾津の西、波羅克阿拉克領の北、庫爾地方白利の東、北古甫地方標多の南にいたつたといふ。

(14) 敦煌文書では rNags であり、後代の文献では gNags が普通である。例えば、十一(十三) rgyal phran の表を敦煌文書は H.B. Ja. f.5a を較べて見るに rNags rje が gNags rje になつてゐる。

(15) Karma pa De bshin gcegs pa (1384-1415) は dBus を gCin kun と書いた道徳 (rNam thar, f.108-R.E.B. p.237, n.8) に gNe Ne stod ありの rNags の異體 gNe から出た Ne を示すといふのであつた。

(16) glin tshah とつては R.E.B. pp.211-213 参照。  
glin が rTsan の一節であつたことを示すのか、 glin と

属する一部の rTsan を glin tshan としたものと不明であるが、 gNe yul は rTsan とかわり合う事実を示してゐる。ついでに glin tshan を Sum ru の東端と結びつけてゐる。

(17) Sum ru の sde に関して、本論では多岐にわたるのを避けて触れなかつたが、簡単に述べて置きたい。 rTse mthon, Po mthon の二つは、後者の Po mthon は Seju と關係するのを P.1285 に見えが、位置を漠然と rGod tshan/rtshan の西北に考へて置ける。 rGod tshan は Phu mdo 1 戸、 hJon stod, hJon smad は、今日の hJon mohi gshun 綠謀雄を含む、 rGod tshan の東北にあると考へる。 hDre stod smad はその東にある Thon Khyab を含み、彼等に接するところにある。敦煌文書に見え Dreju (D.T.H. p.103) と關係があり、今日の特別彭渡(北緯 33°05' 東経 97°10') (hDre po mdo?) といふところと見られる。(べんこく註に参照) Kha ro, Kha zans とつては、前者は Khar ro/dKar ro と同じ、 Kohn rje の dKar po (P.1285) (P.1060) (A.F.L.), sTsan stod sisan dño mkhar (P.1060), Myan ro Phyr kar (P.1290), Phyed kar (P.1286), rTsan ro Phyed kar (P.1285) 等の Kar を併や考へ、或る時代には広く拉垂、 rHa ri 拉達 rGya mdab を結ぶ線の東方にあつたと見られる。 rKon rje





化と見れば、Thon khyab, Se khyab, Se ton (註110 参照)の組み合わせが見られることになる。

この雍希葉布が永沙普とも写され、蒙古爾津族と接して住牧するところから、永謝布または永邵卜(「東蒙」六六九—六八二頁参照)との関係が聯想されるかも知れないが、両者につながりはない。まず、雍希葉布、または雍熙葉布 iung-hi-ie-pu の後の三字は khyab を写しているため A mdo 方言 y' e'ab (PA. p.21 参照)と聞こえる発音をもち、沙普 sa-p'u と写されたのであり、この逆の場合、つまり、沙普の称が希(熙)葉布と発音されてそのように写されたことは全く出来ないことが挙げられる。永謝布(邵卜) iung sie (sau) pu は永沙普と写されても、雍希(熙)布と記録されることは出来ない。しかも、永沙普は明らかに雍希(熙)布の A mdo 訛りとどめたものであることがわかるから永謝(邵)布とのかかわりを絶っているものと云えるのである。次に、俺答汗や永邵卜大成台吉が青海地方を占領したが、その拠つたところは巴顏哈拉山脈の東北に限られ、玉樹四十族の牧地は犯されなかったことが考えられる。その理由として明代を通じて靈藏贊善王から明朝に対する朝貢が続いたことと、一六三九年顧実汗に滅されるまで Be ri 白利族の権勢が保たれていた(「顧実」七五一—七五二頁参照)ことを挙げることができ

る。両者は何れも玉樹四十族に君臨したものである。但だ、四十族の東端にあつた A rig 族は俺答汗と関わりをもつたことが知られている。つまり、蒙古源流にいう阿哩克喇嘛による汗への伝道(「東蒙」七九二—七九四頁参照)の事実である。しかし、A rig 族のいた東提地方は rMa chen spon ra の東北であつたことに注意した。更に、一五七七年、ダライ・ラベ三世を迎える使者三人が、rMa chu (黄河上流)の A rig than までは至つた(P.S. f.194 a b)(「東蒙」七九五頁参照)ということ、俺答汗の勢力圏がこまでは及んでいたことを知ることが出来る。(「顧実」七五四頁註2 参照)

蒙古爾津族の名がどのような経過でこの地方に現れるに至つたかは全く知られていないが、ここから歇武 lie 族が分出しているから決して純粹の蒙古の部族と考えるわけにはいかない。事実、Dz.G. は Mon gul cin に言及しながら他の場合には断り書きをするのに、これを Sog sde とは説明していない。(Dz.G. f.77a の Sog sde は別)或いは、土默特にかかわりのある滿音噴(「東蒙五〇八頁参照)が阿里克方面から平和裡に混入したものであろうか、いずれにせよ「西新」19の示す戸数では三百八十戸に過ぎない。

Dz.G. f.77a 24 rDor gus, Yos gus, Rog gus の名

が見え、Ts.L. p.455 とは A rig, Thar gñu, Wa gñu, bDud gñu と示すところがあり、gus, gñu が州を写した訛りのように見える。「衛通」15の挙げる四十族中には克列玉族、克阿永族があり、Ts.L. p.455 とは gTso yun が Ga bu (斜鳥) と並んでこの辺の地名に挙げられる。Dz.G. f.78b とは rMa chu の南岸にある五都部落の1つ rDo yus の名が見られる。本文では、Yos gus の Yos を rDo Yos gus (gñu) とする Khyab の意は Yos khyab とせられたと察するに留り、それ以上の根拠はない。或いは Yun とするものかも知れない。

雍希葉布、永沙普の布、普が永夏という示し方で消えるのは rtes hñg の b が弱くなつて示されなくなつたのであろう。その点では石渠の渠の方が対音としてより正確である。

永郎下に関して東京外語大学助教授岡田英弘氏から教示啓発されるところが多かったので記して感謝したい。

- (11) rMa は rMa chu (黄河の上流) と rMa chen spon ra に結びついて知られるように rGya roñ の北方の地域に關係する名である。(Dz.G. f.78a 参照) rMa grom と rMa roñ が Kog 河や Kog に関わる点は既に指摘され、黄河(の上流)に近いことも確かめられている。T.A. p. 36(参照)筆者は、新旧唐書の党項伝に見える黒党項の「黒」

はこの対音に違いないと考へている。

- (11) Se ton を消して Thon khyab としめる例を Thomas 氏は註記しているが (T.L.T.D.II. p.162) 既に見たように Thon khyab, Se khyab (註11参照) があり、この Se ton pa と併せて Se, Thon, Khyab の3つの部落要素に分けることが出来る。また、Se が Thon, Khyab の何れとも複合しているのを見る。Se の所在を探すとすれば、やはり Thon, Khyab のいる玉樹附近となり、先づ Nas po の改称した hPhan yul を疑わねばならぬ。

Stein 氏は T.A. に於いて東北チベット部の族關係について追隨を評する精細な研究を示したが、Se に関つて殆んど不明であるとしている。(T.A. p.24)

hPhan yul と掬つた Khri pans sum に従うたが、主の sTag skya bo を裏切つた mNan hzi zun nag po という敦煌文書は、sKya bo bsod/ drehu rgal te bSeh sga bochag go// 「sKya bo は殺せ、Drehu は渡りて bSeh の鞍が置かれた。」という表現を用いている。(D.T.H. p. 103) (Bacot 氏は「驢馬に荷を積みす……」と訳す) その真意は mNan がはなはな Drehu に赴つて bSeh に臣礼を取つたという意味に解すべきものと思われる。Drehu の名は Sum ru の sde と同じ後代の文献に見える hDre stod, hDre smad の hDre に相違なく、Nam po の東方

に想定される。(註107参照) 当然 Khri pans sum の居城 p'ur bəh yu sna は Drehu の一部とされたであろう。Dags po lha de を討つた Sen go mi chen の所領になぜ "gSer khuñ rehu rgai gyi mi" [gSer khuñ rehu 一田の人民] (D.T.H. p.107) の Rehu 或は drehu と同じところを指すのであろうか。gSer khuñ は金沙江の上流を思わせる。なお、rgai は「わたる」「つめる」「わたる」「一田の」の意である。

次に dGu gri zin po rje (Khri pans sum) との関係は明らかではないが、P.1286 は見える hBrog mo nam gsum の王 Se re khri への blon' rKyañ re nag が問題になろう。後代のチベット語資料には、文成公主を迎えに行つた代表の一人に Se ru gun ston なるものがいって mGar ston rtsan yul zun と功を争う話が伝えられてゐる。(H.B. Ja. f.29b, G.S. f.48b) の Se ru は中国資料で mGar の名を写つて薛稷(「古手研」三〇三—三〇四頁(T.T.K. p.28))とあつたものから再構成した名であるが、相当するものを古い資料から求めたのに違ひなく、多分、この Se re khri などから採つたのであろう。然し、これらの名は、並べて見ればわかるように、Se, rKyañ と re khri, re nag に分けられるべきもので、夫々 Se hdre khri, rKyañ hdre nag の異態と考えられる。

この Se が hDre (Re/Dre/Drehu/hDre) の王とされたことを示しているであろう。とすれば、mNan が Drehu に至つて bSeh の鞍を置いたことの意味も理解されると思ふ。

Se はまた Khyuñ po の歌に "Se Khyuñ ni hphan gyis brab" とある Se であつて、吐蕃に功を立てた Khyuñ po が Se と領地を分ち合つたため、本籍を遠く離れねばならなかつたことを嘆いたことは本文(一四頁参照)で見たとおりである。Khyuñ po の今日の位置は全盛時代の版図の一部を示すものであるが、それでは Se khyab 石渠などとそれ程遠く離れていないのが認められる。石渠の西に今日の地図で特利彭渡 Dre bondo という地名がしるされているが、或は hDre に関係があるかもしれない。とに角、hDrehu/hDre/re は hPhan yul の一部をなす、Se の拠点であつたことが出来よう。Se が rNégs に(つまり hPhan yul が glin/glum に)接してゐたことは次のようなところからも知られる。ある敦煌文書によれば、rNégs の所領は rNégs yul gyi gru bshi (P.1266, P.1290) であるが、別に She mo lün sum (P.1089) というのが見え、両者を合せたような Se mo gru bshi (P.1060), Smo gru bshi (P.1286) という示し方がある。後の三例を含む文書には Nas po (=hPhan yul)

の項は記載されていないから、*rNégs* が *Se* の国を併せ領して、*Se mo* (*juñ sum*) + (*rNégs yul gyi*) *gru bshin* という形でその領土が示されたように見える。勿論、これは *Khyun po* の登場する以前のものとあやう。

- (11) H.B. Ja. f.19a に *mGar sTon rtsan yul zun* がチベットの制度を整えるのにあつて *hPhan yul dar rgyal* にあつた *Man po rje* という少年に意見を求め、遣した大臣が沼(*hdam*)ではつて難儀する話がある。この *dar rgyal* と *man po rje* が一つの名であることは続く文章で明らかになる。『敦煌編年記』(D.T.H. p.13) に示される記事によつて事実の不完全な反映であることがわかる。

この *hPhan sha* の *Da rgyal man po rje* のことを指しては *hPhan* の *se* 従つて文中の *hPhan yul* の *Lha sa* に近い今日の *hPhan yul* ではなく、*Nas po* を改称した *hPhan yul* と見なければならぬ。*hdam* は「衛通」15でいう「達木一名玉樹納哈暑番」と註せられる達木の物語的変形であることも論をまたなう。こゝについて *hPhan yul* を *Yos gus, Nags god* (= *hDam*) と共に見出すことが出来る。然し、これから *Ha sha* (吐谷渾) と *hPhan yul* があるを速断してはならぬ。*hDam* と *hPhan* とは敦煌文書(D.T.H. p.120) と *hDam gyi Cog ro bzah* の話がある。こゝで *Cog ro* は *hDam* と *hPhan* が示されている。

他方、H.B. Ja. f.18b には *mThon khyab* の *khos dpon* とつて *Cog ro* 氏の名が見え、*Cog ro* 氏と *mThon khyab* との関わりが認められる。これによつて *hDam* と *mThon khyab* とが関聯することがわかる。先に見た *hPhan* と併せて玉樹、納克書、*Yos gus, Nags god* = *hDam* = *mThon khyab* を捉えることが出来る。

*hPhan yul* は註81で見たとおり *sTon sde* と *Nam po* に挟まれ、或は *glin* と重なる関係にある *klum* の東に位置する。*hPhan yul glän than* というのが *klum* と面する *hPhan yul* の一語を指すのを見え、G. G. vol. Ta. f.198 には *Sron bsan sgam po* の歿した土地として *hPhan yul Zal mo sgän* の名を挙げてゐる。この *Zal mo sgän* は *Zab mo sgän* と書かなければ *sDe dge* を含む地域である。Dz.G. f.75a には *rMa rDza Zab mo sgän* と *Khams* の間に *sgän* と数えつけてゐる。この場合 *rMa chu* と *rDza chu* と挟まれた *Zal mo sgän* の意味で、この西を指して *rNul rDza (dNul rDza) Zal mo sgän* (R.E.B. p.210, n.49) (*dNul chu* と *rDza chu* の間にある *Zal mo sgän*) と書かしてゐる。*hPhan yul* は、こうなると大抵 *Zal mo sgän* にならざるを得ない。位置を定めるとしかういふことが出来ない。従つて *hPhan yul* の位置を定める決め手にはならぬ。(R.E.B. pp.86, 129,

187, 200, 225)

本文で取り上げた Khyun po sPun sad zu tse の歌は  
答えた Myan Shan snan の歌に “Nas po ni ra yul gyi/  
kom rise ni gzigs mo rgyal” “Nas po は吉祥の国 (Ra  
yul) を脱する者であるの如く我等の主” である。この  
「吉祥の国」は現実の Ra yul を指して Nas po の近くと  
あつたことを示している。H.B. Ja. f.19b には「十八鎮  
区」のうちとして hDam god, dKar mo は Phya へ Rva  
の国だと示している。この hDam god は Nam god の誤  
りである。違つたところであるが、これは Phya へ  
結むところのとり違えられたものである。(H.B. Ja. f.46  
は敦煌文書 D.T.H. p.80 である。これは併せては十三国  
と主の表を伝えるが、後者は Nas po ではなく Nam  
god としている。Nam god は dBus の東南部である。今  
へ見前達とのつながりである。今の hDam god は現に Nam  
god である。ものを誤つたのである。Nam god は dKar  
mo は吐蕃王朝の主流部族 Phyaah (N.I.R. text. 1.3, D.  
T.H. pp.97-100 参照) の支配地である。Myan, Dyags, Kon  
(註95 参照) である。Kon は rKon rje dkar po  
として知られ、dKar へ sPo bo の主である。dKar mo は  
dKar po の異態である。Sum ru の Kha ro, Kha zais の sde  
を含むのである。(註97 参照)。すなわち Rva の所領は

なくなるが、吐蕃王朝が次第に親族の権力を削いでつた  
こと、後述するところから併せ考えると、sPo bo の北  
部とその東をつれた形にならなければならない。こ  
れ、Rva の国は Khyun po 領 rTsan smad の東または  
東南方角にあつたと考えられる。

敦煌文書には Khyun po を Ra sans rje (P.1286, P.  
1290) として示している。一本だけ (P.1060) は Khyun  
po dan Ra tsan rje として dan を挿入しているが、この  
dan は dran rje/dan rje の意である。腰々接続辞と誤られ  
るのである。Khyun po は Rva/Ra yul へ rTsan smad へ  
の間は klum へは kluis god の一部をなす支配した  
ことを現わす称号で、rTsan Bod 二万户を領有したこ  
と、Khyun po 全盛時代の事実を反映するものである。  
Dz.G. f.776 には sDe dge に対して lDan khog,  
glin bar ma などと共に Ra nag, Ra ges の地である  
こと。現在の地図では察雅 Brag gyab (G.T. p.182,  
n.612) の南に洛加 Ra dzi の名が見出される。それど  
うの区は Khams の川に sgan の川として Dz.G. f.  
75a へ sPob po (sPo hbo, P.S. f.217b) Ra sgan へ  
ある。明らかに sPo bo へ Ra yul へ地続きであり  
たか、全部または一部が重なつたことを示している。  
Stein 氏の研究には (T.A. pp.15-16) bSe Khyun

hBras, Se Khyun dBra の二つが扱われているが、この hBras, dBra の異態として Ra が示されている。筆者の見解では、dBra, hBra は gdun drug<sup>116</sup> 六族の一つとして見えてゐるが、dBra は Shan shun の dBrad (Sribs yul Hol mo gon [P.1290]/Shan shun Hol mo lun rin [G.C., f.164b]) と Ru lag の Brad (sNa nam 領 H. B. Ja. f.196b) の Khyun po を Nam pa を仲介に混入したもののようである。hBras の二つは云うところを知らないが、Ra は既に見たところ、Kluns god の一部と共に全盛時代の Khyun po に領有せられ、Khyun po の東南にあつた。また、Se は敦煌文書に見えて Khyun po の歌によつてその所領を分割して Khyun po に譲つたことが知られている(本文一四頁註70参照)が、恐らく Nam po の一部も Khyun po が領有して hPhan yul と地を接してゐたのであらう。今、更に Nas po (=hPhan yul) が Ra yul を自由に出来るといつたことを知り、Se Khyun Ra が一団に見られる程互に接近してゐたことも併せて認めることが出来た。先には Se の拠つたところとして hDrehu を含む hPhan yul (註116参照)を確認した。これらの所見を綜合すると Se の拠つた hPhan yul は Khri sroñ lde brtsan 代の Phyugs mshams, Kya の所領だつた Nam po, dKar mo 等の東側にあり、hDrehu/hDre/Re

はその北側の一部をなしてゐたと考えられる。一方、hPhan yul の西にゐた glin/klum/klum/klon は註102に見たところの主として Nam po に重なる位置にあつたようである。すなわち、hPhan yul は sDe dge を含む rMa chu (sTon sde), rdza chu (Nam po) 間の地域と考えつて、この二つなら、rMa rdza Zal mo sgan が hPhan yul Zal mo sgan と重なるものと見て、ことが出来る。

(11) Dz.G. f.77b rMa chen spom ra の西南にあり、その東に rDo khog, hDai khog, sMar khog の三地方があるところ。これらは Hor khog の東北であるとも示されてゐる。(G.T. p.189, n.686, 687, 688 参照) 註116で、あれ黒党項の Kog (°khog) は khog を含む地名と関わりがあると思われる。

(118) 多弥亦西羌族、役属吐蕃号難磨、浜梨牛河、上流土多黄金、「新唐二二下」と蘇毗に就いて示される。犁牛河は楊子江上流、即ち金沙江であつて玉樹四十族の中を貫いている。多弥は當迷と共に敦煌文書の Thon myi (D. T.H. p. 13, Sum pa の Kam と争つて仇討ちをしてゐる) にはほ間違いない。唐書地理志鄯城の条に犁牛河 hBri chu は多弥 Thon myi の西端として示されてゐる。また学者の研究では、白蘭、多弥、蘇毗の順が入吐蕃道として確かめられてゐる。〔古チ研〕一二五頁参照) 筆者は

白蘭を *Sum yul* の主、*hBal* の対音、又はそれと大臣 *lTan* の複合の対音と見、蘇毗を *Seju phyah* *So bya* (註117・131、本文二九頁参照) として *rTsan* のうろに見る。多弥の位置は、*hBri chu* 以東、東提に至る *sTon pa* 族の所在と完全に重なる。

(120) 玉樹四十族中に含まれる洞巴族(「衛通」15、「西新」19)の位置は、「衛通」15に四方の境界を与えられているが、明瞭にわからない。「西新」19によれば、蘇魯克族と最も近くて百里、格吉族とは三百里を距てていたとある。格吉三族のいたところは登坡と呼ばれるが(同西書)「恐ろく洞巴にゆかりの地であろう。蘇魯克は「玉調」の地図では、*Nom chu* 上流、南支流の南岸にある。即ち、*Khyun po* 族の北に在り東経 96° 線上、北緯 32°-33°30' のところに見られる。これと格吉三族(北緯 33°-33°30' 東経 96°30'-96°20')との位置とを併せ考えると、大体の位置を想定できるだろう。「中図」で見える洞巴は東経 97° 線上で *rDza chu* の岸にある。いずれにせよ犁牛河を西端とする多弥とは離れている。

既に言及したところ(註42参照)であるが、*sTag skya bo* が領していた *KLum ya gsum* の地は *Zin po rje Khri pañs sum* に奪われ、後者が吐蕃に討たれて後、*Nam pañi bug sen ti* が領した。*Nam po* は *Nam pa* が領有してつ

たから出た称であろう。Lalou 女史の指摘する(C.P. p. 196) ように *Nam pa* の名は *Sum yul* の *hBal ldzi Matu ti* と共に口で終る特徴があり、白蘭(*hBal-lTan*)の西隣にあつた多弥系の名とすれば、すこぶる領きやすべし、新唐書(註119参照)に吐蕃に服して難磨と称したとあるのはこの *Nam pañi bug sen ti* を指すのであろう。*Nam po* は *KLum ya gsum* と原籍地の *hBri chu* 以東との中間にあり、*Nam pa* が後に *KLum ya gsum* を退きこの地に多く留つたことを示すのであろう。

*Phyugs mshams* 等に領有せられてからは更に退いて *Khyun po* 等の北に留つたとすれば、この洞巴は *Nam pa* の系統に連らなれ *Thon pa* と考えられる。

いずれにしても、*Nam pa* は *sNa nams* と同じであつたところを考え方(T.A. p.36)には賛成できず。*sNa nams* は *Shon/Shon* と共に吐蕃王朝創興時に現れつつある(D. T.H. p.98)。 *sNa nams* の所領は *Khri ston lde brsan* 代ひは *Brad* と *Shon pa* になつてつる。(H.B. Ja. f. 19b) *Brad* は *Ru lag* の中心地(H.B. Ja. f. 19b) *Brad* は *Shon pa* は *Shon/gShon* の旧領であつた筈である。*Shon* と *sNa nams* とは昔、一緒に行動してつるから、古くから境を接していたに違いない。チベット語では、多音節語を一音節化する傾向はあるが、逆の例はないように思

われるので、その点からも受け取りがたい。

- (121) *Thon myi* は *Thon* の人という意味で、*sToh pa* と全く同じが、*Thon* と *Myi* の複合であるが疑念は疑念だが、敦煌文書には他に *Lig myi*, *Nab myi* (D.T.H. p.115, P.1286, P.1260) という用法が見られ、後代の *pa* 「の人」として意味も認められる。ただ、*Mi tag* などの *Mi* (*Myi* は古形) は部族要素を示すものとして *Thon myi* の *Myi* と併せ考える場合有力なものになりつゝ (P. 1285, *Myi btsan Chom po ba ti'* 註124参照) ようにも思われることを挙げておこう。

- (122) *rGya* とつづける註124参照。Sum ru の中心地であつた *rGya god* (H.B. Ja. f.19b) が *rGya* の部族とかわりである地とは当然想像されてゐるのである。今日では *rGya god* の名は稀に見られなう。Sans regyas regya msho や Sum pa mkhan po tse Khams stod (Iha ri 拉里の東、Chab mdo 察木多の西、Po ho/sPo の北) の寺院の名を挙げながら、*rGya god kyi Ban mkhar dgon* に言及しつつ (V.S. p.262) (P.S. f.219a) が、その正確な位置はわからなう。V.S. はこの僧院長の名に二人の *sTag phu* の人を挙げ、*sTag phu* 出身の往持の名は、その他 *rNod A rig than* 阿力寺、*sTag ldan ri bo dPal bhar* 尺爛(註9)、*Byan Iha ri hgo bDe chen glin* 拉

里等の僧院の条で挙げられている。これらの位置は拉里、阿力、尺爛と同緯度上に西から東に並んでいる。拉里、尺爛は *sTag phu gu gri dPal ldan don grub* (1382-1466) の創建とみられ、*sTag phu* や *sTag ldan* は *rGya god* の *sTag pa tsal* の *sTag* と関係がある名で、前者は *sTag pahi phu'* *sTag pa* の奥地を意味する、*sTag ldan* は尺爛のすぐ西にある丹達塘 (*sTag ldan than*) の対音とみえる。また、*sTag skya bo* の *sTag* もこの視点から見られる。

*rGya* を含む地名のうちの辺にあるものは *rGya mdah* 江達、*rGya rdzon* 來宗、*rGya la* 格雅拉を挙げることが出来る。*rGya mdah* を流れる河を或は *Nan chu* とつづける、*rGya chu* と呼ぶ。それと *Kon po* や *Nan po* との境がなつてゐる。Kon po や *Nan po* とは扱われたとみえてつづける。K.Ts. f.9a に示された *Loñ* 即ち *kluns/klum ya gsum* を考えねばならなう。この地は *rGya* の本拠とも考えられる(註124参照)のに僅かにその名を迎へてゐるのみで、Sum ru の構成員として *Thon*, *Khyab* に混じてその一部をなすに過ぎない。*rGya* と複合した *rGod* の方は *rsTan* の重要部族として多くの名をとりつつゐるから *rGya roñ* 方面に移つたのは *rGya* を主力とし、これに混じた *rGod* も含むといつたと見るべきであらう。

る。rGya rgod [P.1294]. [P.1598].

(123) 註93参照。『通典』「边防」の「唐会」96に大羊同とて示されるものは、むしろ Shan shun smad の位置である。ただ、王姓姜葛であるのが、Shan shun smad の Lig, ICog la, sToñ, Khyun のうちと合わない。部族名として Rhya, sPrags, Phyvañ などの間に該部名が見当らない。大羊同を Ya stod とし、Shan shun smad の東にゆいて、Sum ru, rTsan の東側にはじめて Khyab 或は rKyan と rGod との複合部族を想定することが出来る。大羊同、羊同、小羊同という云い方のうち、小羊同と大羊同と置き換えたのではないかと疑われる節がある。(註72参照)なお、羊同は二つの羊同の間に考えられる。

(124) P.1285 にある sGya の王に美人の娘があつて方々の国から貢いで来たが、皆に愛された。ところが Srin yul の王が策を弄して手に入れたという話がある。方々の国はいずれも神話的な国名であるが、前吐蕃期の具体的な国を反映しているように思われる。人の国 myi yul の王はその名が Chom pa batü にて終り、hBal を Nam pa と同じ、Thon myi 多弥を神の国 lHa yul は Ba stan/Ba dan (P.1285) の Guñ (than), 小 Ba [chos guñ] than (D.T.H. p.99)/Tam gul guñ dan (P.1285) と

はつて吐蕃王朝と関わりをもち、Phyvañ の国 Myan を (lTam は Mal tro にあて、D.T.H. p.21. 714 年) 龍の国 klu yul は吐蕃王朝の創興神話に現れる klu de の国を思わせる。この国は Dri guñ bisan po の死体を擁して、鳥人 (bya の目をもち娘) を贖ひ、吐蕃に結局、国譲りをするが、その位置は rKon gi chu rlag に在る。これは、gTsan po の水の消えぬを指すの、lHo pa の国を考えさせる。主題の魔の国 Srin yul は Nag pa dgu sul という、王の名は dGu bo kha。成功したのは他の三國より強大であつたという意味である。rGya は rKon po の北、Thon myi の西、Phyvañ の南東、Srin の南にあつたところ。Srin yul の別名 Nag pa 小 dGu sul の、dGu sul は mChims の国名として見られ (P.1060, 1285) (dKu yul P.1039) (dGuñ yul P.1286) mChims は bSam yas mChims phu の名にちなみ、古くはこの辺を支配したと見ゆなむ。Nag pa は Nags yul den ba (P.1286) とな、rKyan re nag (P.1286) を思わせる。後者は Se re khri を hDre の王であつたとすれば(註116参照)、hDre の一部を、それに連なる Nag を支配したとみえ、すなはち Nag は Nags god, Nags chu の Nags にあて、この dGu sul 小 Nags を指し、dGu bo kha の所領は klu m

ya gsum の北から Yel rab sde bshi に及んでいたことになれ。Srin yul の dGu bo kha と rGya とは姻戚関係になるが、rGya の方が具体的な記述をより多く残し、地名にも rGya god とした跡が辿られ、部族としても納克書三十九族に rGya sde の称をとどめる（注163参照）程だから、母系の rGya が Nag pa dgu sul の dGu bo kha を吸収したのであらう。dgu は「九」を意味し、「天」dgunt「死」dgum を縁語としてくる。敦煌文書によれば、Zin po rje sTag skya bo は Yel rab sde bshi と klum ya gsum を領し、Nen kar rin pa は住むことが（D.T.H. p.102）（注182参照）彼を滅した Khri pans sum がその後 dGu gri zin po rje を称した（D.T.H. p.105）とある。ここに注意し、dGu gri/dGu khri は dGu sul の王をいうのであらう。sTag skya bo は代いつくを得られた称号で Nas po と Yu sna はいつは称することが出来ない筈であらう。これはいつ sTag skya bo が元来 rGya の王で dGu bo（天の徒々）を称していたのにならうかと考えられ。彼は悪名高く王として敦煌文書に記録され（D.T.H. pp. 102, 103）その徒々 Khri pans sum と記たべらう。Khri pans sum の方が吐蕃に滅められ、これは Nam pa の支配 Khlyuñ po の君臨 hDru, Phyugs mts hams の所領とこの地方の主はめまぐるしく変化した。Sum

ru 編成の折に mThon, Khyab と共に含まれた rGya もその主力は既に今日の rGya ron 方面に東遷していたのであらう。ちもなければ、彼等は Sum ru 南部の主力であったのだから、Thon, Khyab などとは異り、rGod と共に Sum ru を形成する主体的部族になっていた筈である。また、この地で既に rGod と接していたからこそ rGya rgod としての複合もありえたのであらう。党項に関するより古い記事（随書、北史）はその族名として拓拔氏のみを載せている。細封氏の見えるのは新旧唐書に至っているが、記事は他に優先している。細封氏を rGod の Sebu とすれば、拓拔氏は rGya の父系 dGu bo/po にならう。一つの解釈として敢えて述べて見たものである。

- (125) Dz.G. f.77a. G.T. p.185. n.660 によれば、これらの部族は rGya sde (lyade) という地域が含まれるという。それが三十九族と中国と呼ばれるものだとあつたらう。dGe rgyas 格吉は五十二王樹四十族に属するであらう。(126) dGe rise (Dz.G. f.77a), sDe dge (Dz.G. f.77b. G.T. p.185. n.661) mDzo dge (stod ma) (Dz.G. f.78a. G.T. p.190. n.695), mDzo dge smad ma (Dz.G. f.78a. G.T. p.191. n.710) dMu dge (Dz.G. f.78a. G.T. p.190. n.701)

(127) 複合部族というのは始めて用いる用語である。説明す

る。例えは、*mThon khyab* とある場合、*mThon* も、*Khyab* も、夫々別の部族であり、*Se* 或いは *rGod* のようなものと夫々結びついて *Se ton*, *Se khyab*, *Thon rgod*, *khyab rgod* という組み合わせを見せることが出来る。つまり、*mThon*, *Khyab*, *Se*, *rGod* 等の名に対応する部族が本来あって、それらのあるもの同志が外から一団とみなされる様な集りをもつ場合、これを複合部族というのである。彼等が血縁的に混合していたか、便宜的に依存し合っていたか、どのような具体的関連をもっていたかは全くわからないが、このような外見的な複合は否定しがたい事実として認められる。複合部族名の要素は、必ずしも部族名によつてのみつくられてはいないようで、例えは *rGod rshan* の *rGod* は *Seju* の異称らしいこと、*rTsan* は *Phyvañ* のいた土地の名かと思われるが、そのようなものも含まれていると考えねばならない。部族名と云つても、*Se*, *rMu*, *Idon*, *Thon*, *Ha sha*, *Sum pa* などという大抵の *Se* の *Khyun*, *dBra*, *hBal*, *rLan*, *dBals*, *mGar* などという、氏族とつてよいものまであるが、どれも複合部族名を形成するわけではない。例えば、氏族名の場合、*Se Khyun Ra* とあるものなど果して一団をさしたのか、ある地域にいた部族名をまとめて述べているのか不明である。また、小さい集団の場合の *Yos khyab* などの例は、

蘇毗の領界 山口

*Yos* は部族名であつたというより地名、或いは或る種の歴史的命名を背負っているので、本来の部族複合ではないかも知れない。しかし、*Se Khyab* と *Khyab* と異なるということではばらく複合部族として一類に考察したわけである。

例えは、*Se Ha sha*, *Idon Mi nag*, *Thon Sum pa* という場合はどうであらうか。Stein 氏は二つを互に異称とするチベットの後代文献の見方に従う。(T.A. p.17-20) しかし、*Se* と *Ha sha* とは全く別のものであり、*Idon* は *Sum pa* (T.A. p.34, n.83, p.37, p.41) と *Nam pa* (T.A. p.37) と一緒に示され、他方、*Thon* が *Mi nag* と結びついて現れる (T.A. p.41, n.110)。それでは、*Se* が *Khyun* と共に見られることもある。これらは元来ある地域の近隣部族をまとめて述べているものであると思われる。筆者の考へでは *Bod kyi mi chen bshi* という *dran Bod* (=Kham) の四大部族の意味で、先づ、*Se*, *dMu*, *Idon*, *Thon* が元来の *Se* の *Se* だ。然し、その外側に後の拡大した吐蕃の版図内に含まれた被支配部族が加わつて *Se* の北の *Ha sha*, *mThon* の東の *Sum pa*, *Idon* の東の *Mi nag* が一ちとめて記述されるに至つたものと考えられる。Thon と Idon とは北と南に夫々あつて *Sum pa* や *Mi nag* と互に接し合つていたから、その

組み合せが固定して現れる必要はない。然し、Thon と Sum pa' lDoñ 々 Mi tag はより近いという点で Stein 氏がこれらを結びつけるのは正しいに違いない。dMu が Phyvañ だ、Se が Ha sha だのみ結ばれるのでもうの見解は支持されるであらう。また Mi tag 自体が (rGya rgod とすれば)、複合部族であることに注意しなければならぬ。従って、これら Thon Sum pa 等を複合部族とは今のところ呼ばないことにしよう。

- (128) D.T.H. p.102 Nen kar 々 H.B. Ja. f.20a 々 yase 々 g-Yas ru の sde だなること。吐蕃の諸王が宮居を置いた場所であるが、これは Nen kar rin pa に似た場所なのであらうか。Nen dkar rin pa は、*stag skya bo* の領した dBu ru 方面の Yel rab sde bshi のどこかにあつたと考えた方がよさ。T.L.T.D.II. p.466 引用の Nen kar gyi sde 々 g-Yo ru の ston sde である。D.T.H. p.116 々々 'Nen kar ni Dog dan ñe' とあるが、この場合の Dog は sa dog の dog (地面・やまごころ) ではなくと思われるが、場所としては不明である。

- (129) D.T.H. pp.102-103

- (130) 唐古特と後代の文献に見えるものが党項であるところから党項の項が rGod の対音であるといえるが、党が何を

示すかは必ずしも明瞭ではない。新旧唐書の党項伝には拓拔赤辞なるものがいて吐谷渾王伏允と姻戚関係を結んでいたが後、唐朝に帰順することが見えている。彼の故地は吐蕃に陥され、その一族は吐蕃から弭藥と呼ばれたという。弭藥は Mi tag でその拠点が rGya ron にあつたことは Stein 氏が明らかにしている(註134参照)。この地はまた lDoñ に接し或は含まれる地でもあつた (T.A. pp.40-41) からそれらの複合部族名 lDoñ rgod を党項の対音として念頭に浮かべてみよう。

新旧唐書では別に黒党項というものが挙げられる。黒党項は Kog yul (註115参照) に拠つていたものと rGya ron の北から西よりに位置すると見たう。その王が教善王と号したというが、教は *mao* しく mThon/Thon/Ton であるからこの場合の党項は Thon rgod の対音と見える。

西夏は党項の国び、号して大夏と称した。夏の対音は、永夏が雍希葉布 Yos Khyab の対音を示す(註116参照)例もあるが、近代のことであるから Khyab と見ることは困難である。また 'Brog mo nam gsum の Se re nag, rKyan re nag の Se, rKyan (註117参照) が西夏の対音に如何にも適合したものであるが、Se 々 rKyan を時を通じて Nas po, klum, klum ya gsum (註117参照) を遠く離れない上、rGya, rGod のいずれともはきり異つた部族で

あるから適當ではない。しかも、西夏の西は宋人が加えた西方の意味であるから、どのみち取るべき考え方ではないであろう。

A.D. p.69, no. 136によれば夏の古く昔は *ra'* であるという。今、かりに *rGya* が夏の対音であるとしたらどうであろうか。*rGya* は *rGod* と複合した部族として *rGya roh* に君臨していたが、吐蕃の圧力に屈して一部はそのままに降り、*rGya roh* に留まった。しかし、赤辞のように唐に内府して *Bran gi Mi nag* (M.S. pp.225-226) になったものもいたのは既に知られるところである。(註134参照)。彼等の一党が吐蕃の没落を機に次第に擡頭して *rGya* の国を樹てたと見るのは極く自然な見方である。

宋が二代続いて三十年を経た太宗の淳化元年(九九〇年)に契丹は李繼遷を押し、夏国王として宋に抗せしめた。この事實はチベット文献にも一応 *Sehu rgyal po* の出現として見える (H.L. f.14a)。ところが、宋に抗しただけの *Mi nag* の王が、いつの間にか、中国の王位を奪ったことになつてあらゆるチベット文献に示されるのである。このことは H.L. の *Mi nag* 王統の冒頭その他 (M.S. p.264 引用文、H. B. Ma. f.156) に一樣に見られる。何故このような誤りがあつたかという点、宋もチベット文献では *rGya (nag)* であつて、夏国を *rGya (yul)* または大夏 (*rGya*

*chen*) として示されたからに他ならない。宋と契丹が夫々後援したのは李繼捧と李繼遷の兄弟であるが、これがチベット文献では宋の太祖太宗兄弟 *rGyahi rgyal po* (*Ci hu tahi dzu*) *spun gñis* (H.L. f.136) と同じ見え方である。 *rGya nag* の王位を奪つたのではなく、*rGya nag* に抗して李繼遷の方が *rGya* 夏の王位についたのである。これを *rGya nag* 宋の王位についたと解して後代の史家により説話的説明を加えられた。スライ・ラフ五世の年代記に至つては、*rGya nag gon mahi khri la gnam gyi lun gis dban sgur ba Mi nag Si hu rgyal po* (f.56b) と宋が始まつて三十年して現れたという *Si hu rgyal po* (李繼遷相当。拓拔思恭の対音) を立派に宋の王位について疑わないのである。大夏国が *rGya chen po* と示されていたために起つた誤りであるに違いないと伝える。(Stein 氏は西夏の姓が唐と同じ李氏であつたため起つた誤りとするが (M.S. p.235, n.5)、チベットでは唐の李氏はともかく、西夏の李氏は殆んど知られていないから従ひがたい)。

*Mi nag* は完項であり、夏である。また、*rGod* を含む *rGya yag*。 *Mi nag* 王統の第六代は *rGyal rGod* (元昊の対音) なる王が現れるが、*rGyal* は *rGya* の異態であろう。事實、*rGya roh* は屢々 *rGyal roh* とも示される。 *Sehu* の存在は *Se hu rgyal po/Si hu rgyal po* の名

によつて確認され細封、左封に対応する。中国資料によれば、彼等の祖はまた拓拔思恭である。とすれば、党項の二族の名が西夏の王名のうちにはつきり見られることになる。rGya が拓拔の異名ならば rGod は Seju (蘇—蘇定方 Seju den pan D.T.H. p.14. 659 年(条参照)) の異称であるとす所以である。

西夏の祖は犬であるというが、P.1285 には rGya とつれに吸収されたと思われ、Sin 国の dGu bo kha に關して Sin の犬の毛に毒をぬいて rGya の王を病におとし、改めてこれを癒して和解する話が見える。拓拔と dGu bo とが対応すればこれも意味をもつてくるであらう。これと似た発想の話は吐蕃の創興神話にも見られるがこの借用であらうか。

(131) 註117参照。吐蕃王朝が先祖の神を Phyvah とすること  
は rKon po の碑文 (N.I.R. text. 1.3) から確かめることが出来る。sTsan stod sisan の主が Phyvah と名乗ることとは本文(一七頁参照)でも見た。rKon rje の Phyvah と違つたことは Ga khnyi, Na khnyi の兄弟が、rKon po に落着くのは Ga khnyi が sPu de guni rgyal じ、Na khnyi が rKon rje dkar po になつたところからわかる。Yar kluñs と rKon po が一族であること(註96参照)共に Phyvah を祖とすると考へるのは当然である。後代のチ

ット文献、例えば H.B. Ja. f.76-8a には Ga khnyi, Na khnyi の二兄弟が Ga khni, Na khni, Bya khni の三兄弟となり、三人が逃びのびた場所は、rKon po に加へて Nan po, Po bo となつてゐる。Nan po は sTsan stod sisan (本文一七頁参照)と同じく Phyvah の地であり、確かに rKon po の同族がいた土地である。sPo bo は rKon po に接した東方の地であるが、新たに加つた Bya khni のために rKon rje dkar po の dkar と Po との間に Po/ sPo bo をちまつた話のこじつけを合せたものである。Bya khni は元來 bya 鳥のような目をした娘とあつて Dri gum bsan po の死体をうつため klu de に贖ふとして出したものであつた。それを Dri gum bsan po の二子という風に話を変えたのである。あつとせんをくすれば、Bya の娘は Phyvah の娘であつて、これを klu de に提供して代償に國議りをうけたことの物語的變形と見る事が出来る。(註124参照)

(132) So bya は D.T.H. p.116 じ Shan shun Lig myi rhya に嫁した吐蕃の王女の歌に見えろ。"g-yas su ni yo ba na so bya ni gre bo chun" 「ぐり糸の鉤に虎の肉をつけたら右側に動かしてはならなう」と云つた後、その理由として「右側に動かしたの So bya とつう小鬼鬼がいる」と説明してゐる。So bya は Shan shun smad の東北

の隣人であつたから了解出来るであらう。

佐藤氏が既に明らかにしている(「古チ研」一三九—一四〇頁)が、So byi が蘇毗の対音で、Supiya に違ひない。Supiya が So bya であることはより確かであり、So が蘇によつて写れると共に、<sup>131</sup> Selu (蘇定方 Selu den pañ D.T.H. p.14. 659年)の対音であることが示し、Phyavh が bya を異態としうることはチベット語学上では説明も要しない。但し、孫波は Sum pa であるが、Supiya にも So bya にもならぬことを断つて置きたう。(注24参照)

(<sup>132</sup>) Supiya (So byi/So bya) が Sum pa ではないことは中国資料の読み方によつても支持される。蘇毗は吐蕃に併せられて孫波と称したので、決して元來孫波と称していたものではない。ところが Sum pa は、中国に事情がよく伝わる以前の Sroñ brtsan sgam po の登位(六世紀末)の頃に mdzo Sum pa (mdzo の Sum pa) としてあらたことが敦煌文書に示されてゐる。(D.T.H. p.111) erton 懸記のチベット文では蘇毗が Sum pa と写されず So byi のまま示されている。しかし、訳の成立は Kiri lde sroñ brtsan 代以降であることは確かである。その当時は Sum pa の称はもとより Yan lag gsum pañi ru も成立していた。何故 Sum pa と訳さなかつたか。蘇毗は Sum pa 族ではなかつし、Sum pañi ru は部族名を示すも

蘇毗の領界 山口

のではなく軍事行政上の区画名だつたからである。Sum pa は多弥の東にあり、蘇毗は多弥の西にあつたことにも注意すべきであらう。Sum pa の酋首は hbal hdzi main ru じ (D.T.H. p. 80) で、その大臣の一は rlan じであつた。白蘭は hbal-rlans の対音を示し、Sum pa であつた。佐藤氏も蘇毗=Sum pa に妨げられてこの同一視を控えたものである(「古チ研」二六五頁)。なお、rlan のトーンは mdzo である。

(<sup>134</sup>) H.L. f.13b. には宋の末に Selu rgyal po なるものが現れ、その末裔が十二代にわたり、二六〇年王位をとつたという。また、Mi nag 王統の起源から説き起して六代目に rGyal rgyal rgod なる王が現れたことも述べている。rGyal は rGya の異態として認められているので改めて問題にするには當らないだらう。(註130参照)

これらの点はもとより、広く Mi nag と西夏の関係について Stein 氏のすぐれた考証があり、これに加えて述べることは殆んどない。筆者の西夏と Mi nag に関する基本的な考えはこれに依存している。その第一章は (M.S. pp. 223-238) 歴史的地理 Géographie his torique と題してチベットと中国との資料から考証が進められる。先ず、中国資料から Mi nag の位置を追求し、rGya roñ 地方にこれを確認する。(pp.223-224) これと西夏とを早急に同一と

する考を排し (p.224) 西夏の登場をチベット資料から Bryan gi Mi nag 「北の Mi nag」 (pp.225-226) と規定しつつその (夏の) 位置を見ていく (p.226)。更に夏と Mi nag の地域的関わりを言語の問題から見ながら (pp.227-228) 弭藥と呼ばれるのはチベットに帰属したもののばかりを指すのではなく、後に夏を建国する拓拔氏もその出身として含めるとする (p.228)。統つて西夏の領域に言及し Tsong kha との関係を見る。(pp.228-231) 党項夏国と弥娥州 (Mi nag) との相互関係に戻り、大草灘 Ca ra ta la や Bryan nos の問題にも触れながら、西夏は Mi nag はかりで成立しているのではないのかも知れないという (pp.231-234)。しかし、この場合、拓拔氏が自らを魏の末裔とすることと西夏の部族要素が雑多であるとすることと結びつてであらうか。(我々も問題にした rGya rgod の称と Mi nag との結びつきが次に論ぜられる (pp.234-235)。しかし、ここに引用される rGod lön については本文で論じたような見方を(本文二八頁参照)取りたいと思う。最後に Stein 氏は Mi nag の王統と中国資料とをきき合せて、チベットで Mi nag の王統として述べられてくるものは西夏のそれと違うことを確認する (pp.235-238)。第二章は Mi nag に関する伝説の整理であるが、ここではふれない。その続篇ともいえるものを Demiéville 氏に捧げた論文集

(Mélanges de Sinologie offerts à Monsieur Paul Deme-  
ville I Paris, 1966 pp. 281-289) に示しつつそのことを記すでよいであろう。

(136) 新旧両唐書の党項伝には拓拔、細封以外の部族名もいくつか見られるが、古いところで具体的な記述が与えられるのは両者に限られている。

(136) 隋書、北史で吐谷渾と附国の何れかに属し、党項と同俗として言及されるものとして、左封 Shu 以下、昔衛 (Seh?) 葛延 (rKyan?) 等が見えている。

(137) 註47参照。T.L.T.D.II. p.40

(138) 本文一三頁以下参照

(138) D.T.H. p.16 (684, 687), p.17 (690, 693), p.21 (715), p.22 (719, 720), p.24 (731) [括弧内は西暦年次を示す。] なお、gsan chen が位階であることと R.F. p.195 註参照。

(140) Sum ru 是 702 年の頃ひまえつる (D.T.H. p.19)

(141) Bod Sum 是 Lalou 女史が注意して註記しつつ (R.F. p.190) が Bod の四翼の Yan lag gsum pahi ru とをいうのひまえつる。Shan shu stod smad が正式な翼となるのは五翼の成立後で、六十一千戸という数え方になつて初めて示されるからである (H.B. Ja. f.19a-20a)。

(142) Tsog stod (T.L.T.D.II. p.51) のように見られる

いが、stod, smad は sde の場合はつきり対応しているの  
で Tsog smad は確実に存在したことを示す。

(143) hloñ yo du は「湖水のあつまり」の意に解した。「考  
異」(下)註62参照。

(144) T.A. p.76.

(145) dbu とすれば「頭」の意になる。dbus 中央とするな  
ら、今日の玉樹近辺を指すべきであろう。

(146) chas ma nan の chas は「別れること」、「主従の關係  
を解消すること」を意味し、そのようなことは出来ない  
と忠誠は誓うが、次の chas nan na によつて不平を示す。

後の chas は cha に s がついた形で、「分け前に關して」  
の意。

(147) G.T. p.189, n.686 参照。